魔法少女リリカルなのは　時空を超えた鋼の騎士軍と探偵

水岸薫

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宇宙に行き願い星である『時の星』に願いに行こうとしたが、突然裂け目に吸い込まれてしまい、出たところはまさかの…海鳴市?!

目次

プロローグ『宇宙がきっかけ』――1
第1話『夜に墜落、出会った魔法使い』――8
第2話『高町家の修復作業と一晩の宿泊…?』――19
第3話『四次元の力とサッカー、突然の敵?!』――27
第4話『グランツ研究所と魔法使い、そしてバレた?!』――46
第5話『依頼とお茶会…そして敵?!』――60
第6話『ジェルシード封印と仲間…?』――73
第7話『温泉旅館で合流した敵!?』――82
第8話『突然の出会い、そして夜の戦い（前編）』――94
第8話『突然の出会い、そして夜の戦い（後編）』――106
第9話『手掛かりはマークとデバイス、そして警報』――121
第10話『謎の組織との戦い、そして雷の魔法使い…』――131

プロローグ『宇宙がきっかけ』

キンッ、キンッ、キンッ!!　ギュイイイイッ　カンカンカンッ
日本のある山の深くにある屋敷の中から、何かが組み立てる音が響く。そこには何かを作っているのか、一人の少年が巨大な乗り物を作っている。
その証拠に、彼の周りには大型のクレーンに変わった機械、コードなどが出ている。
「どうですか勇樹君。あと少しで完成するっていうのですが」
背の高い少女は、勇樹と名乗った少年に向けて言うと彼は「大丈夫だよ」とこう答える。
「あと少しって言っても、あとはこのパーツを付けたら……出来たッ!!」
ガチャッと何かを閉じる音がすると同時に、彼は「出来上がったぞ!」と答える。
「最新の移動メカ『ホワイトナイター・スペースタイプ』の完成だ!!」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「てなわけで、明日はこの『ホワイトナイター』を宇宙用に改造したのを行こうかと思います」

勇樹の言葉に伊江は「突然だな」と言うと霊華も「そうっすね」と同意するように答える。
「なぜ明日なんだ？　宇宙船で行くとしたら明後日からい腫でもいいのに？」
「わたくしもです、宇宙観測としても明日じゃなくてもいいのでは？」
連華と奈々はそう言っていると、百合子が「いえ宇宙に行くのはそれが理由ではありません」と答える。
「明日に願いが叶うと言われている『願いの流星群』がこの地球に近づいてくるのです！」
「あ、そう言えばそうっすね」
「ニュースでもやっていたからボクも覚えているよ」
「私もだ、しかしそれと宇宙船との関係は…」
百合子の話に霊華と太田と蓮華は答えていると、伊江は何か思い出したのか「あ、それでか」と答えると、勇樹は気づいていたかのように「その通り」と答える。
「せっかく宇宙船型に作ったから、みんなで願い事をかなえてやるのはどうかなと」
勇樹の発想にみんなは「それいいね！」と声を合わせるように答える。それを聞いた百合子は「うまくいきましたね」と言うと彼は「そうだな」と答えた。
「それじゃあ少し遠足にしていくのはどうっすか？　せっかく宇宙に行くんで！」

「それはいいな、真莉愛さんお料理を」
「はい、お弁当にするとしたら少し豪華にしませんとね」
「わーい、お菓子も用意しよー！」
「カメラも用意しますか、良い記念になりますし」
「キラ、それはいいアイデアだな」
「わたくしも面白いのを持っていきましょう」
「はい奈々様」
「メカも入れておくか、仲間として願いがあるからな」
みんなはそう言って明日の準備に取り掛かり始めた。
………………………………………………
そして当日、屋敷の近くには補助ロケットが付いたホワイトナイターが用意されていた。ホワイトナイターには勇樹と蓮華、天女が点検をしていた。
「勇樹、そっちはどうだ？」
「エンジンにロケット、燃料に予備の食料に異常はない。すぐに行けるよ」
「そうか、こっちもちょうどみんな入ったところだ。すぐに行けるぞ」
「コントールも以上ありませんでしたので安心を」

連華と天女の報告に勇樹は「わかった」と言いながらホワイトナイターに乗り込むと、2人も乗り込むと同時にハッチを閉める。

操縦席であるコントロール室では、勇樹と百合子、天女が座っていた。
「システムオールグリーン、電子機器に標準装置以上ありません」
「水平性装置に重力発生装置、予備エンジンにも以上ありませんよ」
「わかりました。それでは」
天女と百合子の報告に彼は答えると同時にレバーを掴む…そして。
「宇宙に向けて…発進！」
勇樹はそう言ってレバーを動かすと、画面に『ＳＴＡＲＴ！』と表示されると同時に補助ロケットが起動し、宇宙に向けて発進した。

宇宙に向けて発進して数十分後、勇樹は「メインモードに切り替える、補助ロケットの分離をお願いします」と天女に指示を出した。
すると天女は「わかりました」と赤色のレバーを動かすと補助ロケットは外れて、今度はメインであるロケットが起動して宇宙へと飛んでいく。
「ここでなら重力発生装置は起動しますか…シートベルトを外しても変化はないっと」

勇樹はそう言いながらベルトを外し立ち上がると、浮かぶことなく安定した状態で歩くことが出来た。

そして操縦を『手動』から『自動』へと切り替えたため、操縦は機械がやってくれるようになっている。

「百合子さん、その例の流星群は？」

「あ、実は…ありました。これです」

勇樹の質問に百合子はカバンから『宇宙の秘密』と書かれた本を出して探したところ、『時の星』と書かれた青色の星が描かれていた。

「この『願いの流星群』基『時の星』は、数十年に1度だけ地球にやってくる貴重な願い星で。この星に願いをした人は幸福を得れたという情報があったのです！」

「なるほど、確かに貴重ですね」

「そうです！　そこで今回は一番近くなると友達から聞きまして」

百合子の話を聞いて勇樹は「それでこのホワイトナイターを宇宙に向けて改造した」と答える。

「はい！　そろそろ例の位置に来るはずですが…」

百合子はそう言いながらキャノピーから外を見ていると、突然「あれ？」と何かを発見する」

「百合子さん、何か発見しましたか？」
「発見というか…何か裂け目が見つかりました」
『裂け目』という言葉に２人は何かと思い急いでキャノピーから外を見ると、宇宙が広がる中、黒色の裂け目が現れた。
勇樹は「危ない確率がするから少しよけるか」と言いながらレバーを動かし、ホワイトナイターの方向を変えて発進する…だが。

ゴゴゴゴゴゴゴ……

突然裂け目から強力な『風』が発生し、ホワイトナイターはそれに吸い込まれるように動きが封じ込まれる。
「あ、あれ？　あれれ？」
レバーを動かしても変化がないことに勇樹は気づき、スイッチやつり革などを動かすが変化はない。それどころか徐々に裂け目に吸い込まれている。
それを見た百合子は「あの、勇樹君…」と青ざめた表情で行ってくると、彼は「うん、これはやばいね」と冷静に答える。そして。

「あれに吸い込まれてしまったな」

その瞬間、ホワイトナイターは裂け目に吸い込まれてどこかへと行ってしまった。

そして、彼らが出た先はある魔法が使える世界だとは知らずに……。

第１話『夜に墜落、出会った魔法使い』

『『うわあああああ!!!』』

裂け目に吸い込まれて勇樹たちは驚き、ホワイトナイターは大きな揺れを発しながらどこかへと連れていかれている。

「ど、どこに向かっていますか勇樹くん?!」

「激しい、揺れです!!」

椅子にしがみついている百合子と天女に言葉に勇樹は「待っててください！」と言いながら吊皮を引っ張る、すると上から時計と画面がついた機械が下りてくる。すると。

カチカチカチカチカチ!!

「な、なんだぁ!?」

時計は反時計回りで動き、画面には『時空間に異常発生!!』と表示されている。

「時空間…まさか時空間の穴ですか!?」

「いえ、地球上ならともかく、この宇宙に発生した時空間は初めて見ますよ!!」

画面を見て天女はつぶやくが、百合子は慌てて突っ込む。だが勇樹は「ありえるかもとつぶやく。
「え、勇樹君まさか本当に信じているのですか?!」
「時空間の現象の一種で、最近時空と時空の混じり。今で言うと『ねじれた世界』が生まれている。どうして起きているのかは不明だけど…まさか」
勇樹はそう言って画面を見ていると、今度は画面が『出口発見出口発見!!』と表示された。
それを見た天女は「操縦を起動してください!」と言うと勇樹と百合子は「わ、わかりました!」と急いで椅子に座り、操縦を起動する。
するとホワイトナイターのブースターが起動し、飛行を開始し始める。ホワイトナイターはそのまま飛行していくと白い穴へと入っていく。
………………………………………………………
白い穴から出てきたホワイトナイター、勇樹たちはキャノピーや窓から外を見る。
そこは宇宙ではなく街並みがひりがっている場所へと出ていた。
「ここって…地球?」
「それは分かりますが…どこっすか?」
それを見た太田と霊華は驚いていると、警報が鳴り響き始めた。そして。

バシュンッ!!　バシュバシュンッ!!

ロケットブースターから火が出ていたが、突然煙を放つとそのまま降下していく。
「あー…これ落ちているっすね」
「落ちている」
「落ちてますね…」
外を見て霊華と太田、奈々は冷静に言っていると。伊江が「って、墜落じゃねえか?!」と慌てるように言いだした。
それを聞いたみんなは「あ、そうだった!!」と思い出したかのように顔を青ざめていると。ホワイトナイターは一気に地上へと墜落していく…が。

バシュッ!!

装甲の一部が開くとパラシュートが出てきて、速度を落としながら地上へと墜落していく。
「っと…これがあったんすね」

「わ、忘れていたわ」
「よかったぁ、もうだめかと思ったよー！」
パラシュートを見て霊華と桜、福音は安心すると。ホワイトナイターは森の中に着陸する。
「森の中か…ここなら何とか修理できるな」
ハッチを開いてあたりを見渡し終えた勇樹は、パラシュートを中にしまい工具箱を手にしてエンジンがあるところへと行く。
エンジンの内部を管理する専用のふたを開けて、エンジンはどうなっているか確認する。
ガチャッ！　バシュウウッ!!
!!
「うわっ！　これはひどい…!!」
蓋を開けた途端、蒸気が出てきてエンジンのパイプは溶けかけて電子機器はいかれて使い物にならない状態になっていた。
それを見た勇樹は「時間がかかりそうだ」と言いながらトライバーを出して修理していく。すると。

ドガアアアアッ！

「んっ!?」
　突然何かが爆発する音がしたため勇樹は作業を止めてあたりを見渡すと、町の方から何かが破壊したのか黒煙が立ち上がっていた。
「あれは…もしかして黒薔薇か!?」
　勇樹は急いでエンジンを修理するとふたをしてホワイトナイターに乗り込むと、操縦席へと行きエンジンを起動する。
「勇樹君、今乗って！」
「黒薔薇の可能性があるが、今は急いでいくぞ！」
　勇樹はそう言ってアクセルを踏むとブースターは起動空を飛ぶ…が、まだ修理途中なのか飛んでも途中で落ちたり上がったりしている。
……………………………………………………
「音がしたのはこのあたりだが…いったいどこに？」
　勇樹はそう言いながらあたりを見渡していると、百合子が「あ、いました！」と慌てていったため勇樹は「どこ?!」と彼女に質問する。
「えっと、今向いているのが西ですから…北です北です！」
　百合子の指示に勇樹は慌てて包囲を変えてスイッチを押すと、天井からモニターが出

てきて画像が映し出される。

そこに映っていたのは、黒い何かがオレンジ色の少女をお睨みつけていた。

その少女は赤色に光る弾が付いたステッキらしき道具を握っていた。

「あれって…まさか魔法少女!?」

「言えるな…って他の世界に魔法少女はいませんよ百合子さん!?」

勇樹の言葉に彼女は「あ、それもそうでしたね」と慌てて謝る。勇樹は「謝ることじゃないけど」と苦笑いしている中、天女が「お借りします」と操縦席からリモコンを取り何かを入力する。そして。

「『プラズマパンチ』起動」

カチッ　　ビヨオオオオンッ!!

天女がスイッチを押した途端、ホワイトナイターの鼻のアンテナの先頭についている球体が放たれて、黒い生き物に当たると苦しみながら横に倒れる。

「あ、天女さん…すごい」
「油断していたあなたたちが悪いですよ。操縦席を３人乗せてよかったです」
　天女の毒舌に２人は「す、すみませんでした」と土下座をした。天女は「それは後にしましょう」と言うと彼は「あ、そうでしたね」と慌てて操縦席に座る。
「あの少女は怪物から見て左の方向に逃げていった模様です」
「うーん…黒薔薇の仕業だったらなぜあの子を狙うんだ…保護してやるか」
　勇樹の言葉に百合子は「それじゃあ、行きますか！」とレバーを動かすと、ホワイトナイターは少女を探しに発進していった。
…………………………………………
『魔力反応アリ、魔力反応アリ』
「あ、意外っ見つかるのが早いですね。魔法を使う人はどこにいるか分かりませんから」
　百合子はそう言いながらスイッチを押すと、画面委は例の少女が映っていた。それだけではない。

「え…フェレット?」

　15センチほどある小さなフェレットが少女の近くにいた、それを見て百合子は驚いていると。勇樹が「あ、いた!」と声を出す。

「何がいたのですか勇樹くん?!」

「いたというより発見したんだ!　あれは黒薔薇じゃない、一種の呪いだ!」

　勇樹の言葉に天女は「呪い…ですか?」と頭を傾げる。

「呪いとはどういう意味ですか?」

「黒薔薇のメカや道具だとしたら、どこかにドクロマークか黒薔薇のマークが付くんだけど。おかしなことにこの生物にはそれがないんだ」

　勇樹はそう言って先ほどの生物を見せると、確かにそれらしきマークは映っていなかった。

「代わりに、あの生物の額に数字が描かれてい。あれはどう考えても黒薔薇野じゃない」

「あの数字…アラビアのデモないですね」

　勇樹と百合子はそう言っていると、天女が「前を!」と言ったため何かと見てみると。桃色に光る何かが黒い生き物に当たると黒い生き物は消滅していった。

「消えた?!」

「いや、消えたなら探知機に映っていないよ。ほら」
勇樹はそう言いながら百合子に探知機を見せると、センサーには3つの点が光っていた。
「きっと、封印したのは生き物が覆っていた先ほどの黒い何かだと思うよ」
勇樹の言葉に百合子は「あ、安心しました」と言いながら息を吐いた…その時。
「あの、勇樹さんと百合子さん。少しよろしいですか？」
天女の言葉に2人は「え？」と振り向くと、彼女は「あれを」と上の画面に指をさしたため、それを見てみると。
『警察が来ています、急いで逃げたほうが安全です』
それを見た勇樹は「急いで逃げよう」と言いながら椅子に座り、レバーを動かすと。ホワイトナイターはそのまま上へと逃げていき出来る限り隠れるようにしていった…が。
ビビビビビビビッ！
『Ｄａｎｇｅｒ！　Ｄａｎｇｅｒ！　エンジンに不調アリ、エンジンに不調アリ！　こ

のままですと空中分解する可能性があります！』

今度は警報機が鳴ると同時に画面に警告文が出てきたため、百合子は「え、ええ?!ええええ!?」と慌てふためく。

勇樹は「まずい、修理途中なの忘れていた！」と青ざめた、その時。

バギッ!!

「「え?」」

外から音がしたため勇樹たちは見てみると、左翼が外れたため3名は「あ、これはもしかして」と目を合わせた…その瞬間。

ヒュウウウウウッ!!

「「やっぱり落ちますよねえええええっ!!」」

そのまま回転しながら落下していき、今度はパラシュートが出ないため慌てふためい

た。
そしてそのまま右翼、装甲がはがれていき。ついにはコックピットも徐々に外れていき、そのまま落ちていった。そして。

ドガアアアッ!!!

ホワイトナイターは分解したまま民家に落ちてしまった。
幸いそこは庭で合ったため家自体に被害はなかったが、ホワイトナイターが落ちた庭には地面にへこみが付いた程度で済んだ。
コックピットの装甲が分解しかけた中には、目を回した勇樹と百合子、気絶した天女が目を回していた。
そして、この民家にはある人物が住んでいたことも知らずに…。

第2話『高町家の修復作業と一晩の宿泊…？』

「いててて……ここは？」

痛みが頭に響き、勇樹は起き上がると目にしたのは機械が並ぶコックピットではなく。布団の上にいた。

場所はどうやら今だろうか畳の臭いがする、勇樹は「どうしてここに？」と思っていると、襖が開いく音がした。

勇樹は何あkと思い振り替えてみると、先ほどの映像に映っていた少女と同じ髪色をした女性が入ってきていた。

「あら、起きたの？　けがは大丈夫？」

「え、あ。はい」

勇樹は戸惑うように答えると女性は「よかったわ」とほほ笑みながらお盆に薬と水が入ったコップを持ってくる。

「少し熱があったから休んだほうが良いわ、他のみんなも熱を出していたから他の部屋に動かしているわ」

「みんな…はっ！　太田にみんなは!?」

彼女の言葉に勇樹は思い出し、急いで彼女に向けて言うとその人は「落ち着いて」と言いだした。
「みんなは軽いけがをしていて、すぐに治ったの」
「よ、よかった」
彼女の話を聞いて安心すると、彼女は「そう言えば名前を忘れていたわ」と紹介をする。
「私は高町桃子、それにしても驚いたわ。なのはがかえってきたとおもったらいきなりロケットが落ちてきたから」
「あ…どうも失礼しました」
庭に落ちた宇宙船を見て勇樹はすぐに土下座すると、桃子は「あまり気にしないで」と答える。
「幸いそこの庭は物置小屋を作ろうかと思って開いていたから被害は少なかったわ」
「そ、そうでしたか…でも」
「あまり深く気にするなよ」
勇樹の話に入ってきたのは、黒色のショートヘアーをした男性。年齢からして２０歳ほどだろうか。

「他のみんなも謝っていたし、大きな事件じゃないのは分かったからな」
「は、はぁ。そうですか…」
　それを聞いた勇樹は安心すると、太田が入ってきて「ということです」と答える。
「僕たちは軽傷で済んだけど問題のあれは壊れてね、すぐには修理が出来ないよ」
「太田…そうなんだ」
「あと、地面は多少沈んでいたけど。一応訂正すれば大丈夫だよ」
「わかった」
　太田と勇樹の言葉に2人は目を丸くしていると、桃子が「あの」と言いだした。
「皆さんが乗っていたあれ、壊れてしまいましたけど…どうしますか?」
「そうだな…お前たちのケガが治ったらでいいけど」
　桃子と恭介はそう言っていると、勇樹と太田は「可能だよ」と言いながら立ち上がり、急いでホワイトナイターのところへと行く。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「うっへぇ、これはすごいことになったな」
　勇樹は驚くようにホワイトナイターを見て答える、現在ホワイトナイターは、部品がすべて外れて装甲は一部外れ羽根はどこかへと消えてエンジンは向きだし、そして操縦席であるコントロールは完全に壊れて動けない状態になっていた。

「勇樹君、これは修理可能?」
「残念だが今は無理だな、一応あれは大丈夫だからそれで移動とかは行けるけど」
　勇樹はそう言いながら道具を出していき、メカを分解していく。
「え、分解するの?!」
「一時的にだよ。まずは地面をどうにかしないと」
　勇樹はそう言ってメカを分解し終えると、太田が「あ、あれ出すよ」と言いながら茶色の袋を取り出していく。
　それを見た彼は「お、ありがと太田」と言いながら部品をカバンに入れていき、今度はオレンジ色の鉄でできた特殊なテントを取り出した。
「土が終わったらこっちの手伝いお願いな」
「わかりました!」
　２名はそう言いながら作業をしていくのを、黒髪の短髪をした男性、高町士郎は「器用だな」と感心しながら見ている。
「こっちはつけて!　そしたら部品Ｎを」
「伊江がいないから大変だね…あ、わかった!」
「そしたら、これで…もうすぐだ!」
　勇樹はそう言いながら部品を付けていくと、最後の部品であろうガラスの板をオレン

ジ色の板に付けて。それをテントの一部に固定しねじで止める。
「なんて言っているとすぐに完成！『四次元テント』の出来上がりー！」
「おー！」
完成したテントに太田は目を輝かせていると、桃子たちも驚きながら拍手をしている。
「さて今回は…眠い」
「夜だからね、時間は…午後2時かぁ、ふあああ」
太田はあくびをすると、伊江が「大丈夫か？」と言いながら駆け寄ってく。
「あ、まだケガが」
「大丈夫です、これぐらいならっと」
心配する桃子に伊江は答えながら太田を支えると、そのまま家の中へと入れていく。
「まったく、ここまでやるのか普通？」
「あはははは…ごめんね」
謝る太田に彼女は「しょうがねえ奴だ」と怒るが、「お人よしだなお前は」と言いながら彼の頭をなでる。
「すみません、オレたちが寝るところが出来る部屋はありますか？」
「部屋は…確か道場があったな、朝は美由希と恭介がやっているがそれ以外はあまり使

用していないな」
「え、良いのですか?」
士郎の言葉に伊江は目を丸くして言うと、彼は「ああ」と答える。
「少しの間だけど使ってもいいよ、朝になったらちゃんと清掃することが条件であれば」
「朝か…何とか無理に起こせば行けるな。わかりました」
伊江は頭を下げると、勇樹は目を凝らしながら「それじゃあ、そこにいこう」と言いながら道具を入れ終えると、そのまま伊江と共に道場へと行く。
伊江は「あ、追い待て!」と言いながら太田を背負いながら急いで走っていく。
……………………………………………………
その頃、どこかの洞窟内では。
巨大メカであろう大量の機材や鉄屑、工事用具の乗り物などがたくさん置いていた。
その奥には赤色のロングヘアーをした女性が何かを作っていた。
「これを付ければ…何とかできるな」
彼女はパソコンに何かを入力していくと、後の機材が突然浮き出し何かを組み立て始める。
それは徐々に出来上がっていき、一部は青色の球になり大きな翼ととげが付いたしっぽが付いていき、掃除機のようなくちばしが付いていく。

そして赤色の宝玉が胴体の中にしまい込むとメカの目が赤く光り立ち上がる。
「完成だ…ついに完成したぞ！」
彼女はそう言うと作業員と思われる人物が「本当ですか!?」と反応する。
「この惑星にあったのは分かりましたが、肝心のエネルギーはどこにあるか分かりませんでしたね」
「ああ、だが幸いそのエネルギーが場所はこの街の中。そこを中心にさアが洗馬わかるな」
２名はそう言うと彼女は「そうだな」と答える。
「そして、私が完成したこの『巨大機械生物』で行けば。エネルギーを捕まえることが出来る！」
「博士、そろそろ行きましょう！」
博士と名乗った女性は「ああ」と答えながらヘルメットを作業員に渡す。
「ただいまから『ジュエルシード』捕獲作戦を行う！　捕獲次第すぐに専用のカプセルにしまうんだ！」
『『はい、博士！』』

作業員はそう言うと、鳥型のメカは『バードッ!!』と叫ぶのであった。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
そして次の日、伊江たちは朝日が昇る前に同情から出ていた。
「あー寒いな」
「朝だからね…まぁまだ朝日が当たっていないのも温かくならない原因だけどね」
伊江の言葉に太田は苦笑いで答えていると、勇樹が「それじゃあ準備でもするか」と言いながら例のテントをカバンから出していく。
「そう言えば勇樹君、そのテントの説明してくれない?」
「そうっすね、うちも初めて見るっす」
「わかりやすくでいいから教えてくれ」
勇樹の道具を見て、桜と霊華と蓮華は疑問で言うと彼は「これですか」と答える。
「まぁこの道具は口で説明するより実際に入っていけばわかるよ思いますよ」
勇樹はそう言いながらテントの中に入っていったため、彼女たちも何かと思いながらテントの中に入っていく。

第3話『四次元の力とサッカー、突然の敵?!』

「ここが四次元テントの中?」

太田はそう言うのも当たり前、見た目は2人がやっとは入れるほどの大きさだが中は非常に広い構造になっていた。

入り口から入るとまずは階段があったためそこから下に降りていく。そして次に目にしたのはドームのように広い場所で天井には無数の明かりが付いており壁にはスイッチが9つもついている。

「思った以上に広いですね」

「驚いたっす…」

「すごいお兄ちゃん!」

テント内を見て天女と霊華は驚き、福音は目を光らせながら勇樹に寄ったため彼は「そ、そんなことないよ」と照れる。

「圧縮機能を搭載した特殊な道具でね、広さは東京ドームと同じで高さは7階建てのマンションほどあるんだ」

「ほへー、改めて聞くとすごい大きさっすね」
　勇樹の言葉に霊華は再び驚き、桜は「ところで」と勇樹に向けて質問する。
「先ほどの次元の穴、あれは一体何が原因で起きたの?」
「桜さんの言う通りです、勇樹さん。一体どうしてわたくしたちがここにいるのですか?」
　桜と一緒に京子はそう言うと、勇樹が「それなんですが」と言いながら壁についているコンピューターを起動する。
「この時空間の穴には特殊なのでして、異常なデーターがたくさんあったんです」
「ふむ、つまりこの世界とつながった穴は貴重な穴。と言ったほうが良いだろうか?」
「アレンさんの言う通りです、この世界は少し…いえ何かデーターが変わっていまして。もう少し調べないと分かりません…」
　勇樹はそう言いながらコンピューターを起動していると、太田が「確かに」と言いながら画面を見て言う。
　画面にはこの世界の時空間データーが現れており、２進数で表示されているがこの世界のデーターではないということだけは分かる。
「それじゃあ、これって…平行世界ね」
「なるほど、それだったら同じ地球でも何かが違うか」

「しかし問題があるな…この世界は一体何がおかしいのか少し調べないとな」
　勇樹はそう言って画面を見て言うと、文が「勇樹！」と慌ててきた。
「例のレーダーに反応した、神社に1つ！」
「神社、確かなのはは今下校していた気が…」
「ああ、少し様子を見たがどうやら猫に近い生物だ…ライオンだったら」
「あ、危険だな」
　文の言葉に彼は納得しているなか、伊江が「ちょっと待て」と2人の話に入り込む。
「レーダーってなんだ？　少し説明させろよ」
　伊江の言葉に勇樹は「簡潔に言うと『魔力探知レーダー』」と言い始めた。
「装置から半径２０キロ以内であれば反応する特殊な道具で、魔力にしか反応しないが今回のために用意したんだ」
「少ない時間で作ったのかよ…感心するぞ」
　彼の言葉に伊江は苦笑いすると、百合子が「それよりも」と再び彼らの話に割り込むように言いだした。
「なのはさんがもしその生物に巻き込まれたらどうするのですか!?　メカはまだ修理していますし、急いでいった方が！」
　慌てる百合子に桜は「それは大丈夫よ」と答える。

「え、何を言っているのですか桜さん！　いくら何でも無謀では!?」
「いや、百合子さんそれは桜さんの言う通りだよ思うよ?」
「勇樹君まで!?」
　いつもは少し反論する勇樹に百合子は驚くと、彼は「考えてみてよ」と解説と理由をしだした。
「いくら小学生のなのはとは言え、魔法少女で自分の力で頑張っているんだ。ここでオレたちがいつまでもサポートをしていると相手は成長しないんだ」
「う…でも…」
「まぁ百合子さんの言いたい気持ちはわかるよ、彼女はまだ小学生だからな。危険な事情や助太刀位はちゃんとしないとな」
　勇樹はそう言いながら百合子の頭をなでると、彼女の顔は赤くなっていきついには「あ、頭を撫でないでくださいよー!」と照れながら彼をポカポカと叩く。
　勇樹はもちろん「あわわ、玉井はいいじゃないですか」と困りながらも笑顔で返答する。それを見ていた文は「あー、追伸」とジト目で彼らに向けて言う。
「ジェルシートはもう封印した、失敗に近いぞ」

それを聞いたみんなは「おい」とジト目で勇樹と百合子を見ていったため、2人は「すみませんでした」と即刻で土下座をしたのであった。

……………………………………

何がともあれ、一応（仮）本部は完成し庭をきれいにしたり道場を掃除したりしていた。テントの件は士郎に話しておいたため安心し、この場所は『海鳴市』と言うのもわかった。

ちなみになのはと一緒にいるフェレットは（彼女から聞いた話によると）どうやら変身しているが『ユーノ・スクライア』となのは聞いてわかった。

ホワイトナイターが修理し終えるまでは、しばらくの間だがなのはのご両親が働いている喫茶店の手伝いをすることになっている。幸い勇樹以外に天女と真莉愛に伊江、そして福音は料理を作るのが得意であるため桃子と一緒に行動していた。

勇樹は今テントの中で何かを修理しており、太田と幹子と奈々はレジや商品を届ける作業をしていた。

そして今回、幹子が「サッカーの仮監督をすることになった」と説明した。なぜサッカーの仮監督になったかと言うと、「士郎は意外なことに地元のサッカーチームの監督をしている」と幹子から話を聞いた。

それを聞いた勇樹たちは「意外」と目を丸くしながらも、彼女が監督をしている地元

のサッカー『翠屋ＪＦＣ』の試合を見に行った。
「それにしても意外だな、幹子が監督をするなんて」
「そうですね、ですが士郎さんの気持ちはわかりますよ」
「うっす、士郎さんは監督と喫茶店をしているっすからね！　これくらいちゃんと手伝わないといけないっす！」
勇樹と太田、霊華はそう言っていると幹子は「おいおい」と苦笑いで彼らを見て言う。
「ところでなんすけど…なのはさんの左右にいる紫色のロングヘアの少女と金髪のロングヘアの少女は一体誰っすか?」
霊華が幹子に向けて小声で言うと、彼女は「ん?」と目を丸くしながらなのはを見て数秒後、彼女は「ああ」と何かに気づいたのか小声でこう言ってきた。
「紫の少女は月村すずか、金髪の少女はアリサ・バニングスと言うんだよ。なのは君と同じ学校の同級生なんだ」
「なるほど…それにしても詳しいな美樹姉」
勇樹の言葉に彼女は「まあね」と自信気に答える。
それを聞いた桜は「さすが、情報集めさん」と言うと彼女は「おいおい」と苦笑いする。
「幹子さん。練習はいいですか?」

「お、そうだね…そろそろ始めるか」
　太田の言葉に彼女は反応すると、対戦チームの監督に「そろそろ開始しましょうか」と言うと相手は「そうですね」と答える。
「さすが美樹姉、相手が老若男女問わずコミュニケーションをする」
「女性恐怖症の勇樹君は少し無理かな…相手が男性だったら行けるけど」
「太田、言いすぎだ」
　勇樹の言葉に太田が答えるが、伊江が彼の頭をたたきツッコミを入れる。
・・
「試合結果は翠屋ＪＦＣが2点で相手チームの桜台ＪＦＣが0点…すごい差だな」
「相手も強かったけど、キーパーのチームワークで結構守れたんだよ」
　サッカーの試合結果を聞いて霊華は驚き、太田はサッカーの内容を簡潔に言うとアレンは「驚いたな」と彼女が驚くように言いだした。
「少年たちだけ挑んでいたと思ったら、まさかここまで差があったとは…」
「アレンも驚くのね、まぁ私も流石に驚いたわ」
「そうっす！　アリさんのようにここまで力があったのは驚いたっす！」
　アレンの言葉に桜も同情するように言うと、霊華は目を光らせながら真剣に答える。
　すると伊江が「ところで」とあたりを見渡してある事を言いだす。

「勇樹はどこにいるんだ?　ここに帰ってきてから見かけないが…」

　伊江の言葉に太田は「ああ、それなら」と彼は『現在立ち入り制限ありマス』と書かれた看板に向ける。

「なんだか『ホワイトナイター』の修理と同時に、今回持ってきた例の７体のメカを組み立てているって」

「７体のメカ…あー、確かに今は少し重要だな」

　太田の言葉に伊江は納得するように反応すると、百合子も「確かにそうですね」と答える。

「今私たちが使っているあの乗り物は壊れています、修理してから行動するのに時間はかかりますからね」

「代わりにあれらを持ってきておいて、ここで使うことがあるから持ってきたが。まさか役に立つとはな」

　百合子に続いて文は寝ぼけながら答えると、京子は「まぁ、私たちに役目は流石にありませんよね」と苦笑いしながらケーキを食べた…その時。

『ビビビビビビビビビビビビッ！』

『『『ぶっ!?』』』

突然警報音が鳴り響き、それを聞いたみんなは突然のあまりにケーキや紅茶を噴き出しかけていた。

「お、太田。まさかこれって！」

「ジェルシード！　いきなり来るのは想定外だよ！」

伊江と太田はそう言いながら画面を見ると、レーダーは町から反応したいたため百合子は「え、街中?!」と驚く。

「これは想定外！　急いで勇樹君にメカを！」

「そうだね、勇樹君に知らせてくる！」

百合子の言葉に幹子は急いで勇樹がいる部屋へと走っていき扉を開ける。

「勇樹君！　レーダーに反応が!!」

「そうか！　それだったらちょうど組み立て終えたメカがあるぞ！」

勇樹はそう言いながらスイッチを押すと、周りの明かりが付くと同時にあるメカが見えてきた。

　それは巨大な灰色に覆われたブリキのロボットだが角張っておらず冷蔵庫のようになっていない、むしろ電柱のように円柱に近い形をしていた。
　顔は丸く頭に虫眼鏡マークが付いており２本のアンテナが付いている。真ん中の左右にはねじのようなダイヤルが付いている。

「ちょうど『ブリキンダー』が終わってね、急いでこれに乗っていこう!」
「え、あ。うん」
　勇樹の言葉に幹子は戸惑いながらも、みんなに知らせに急いで行動していく。そして知らせに行って数分後、幹子と一緒に太田と伊江がやってきた。
「勇樹、急いで乗るぞ!」
「よし来た、ぽちっと!」
　伊江の言葉を聞いた勇樹はスイッチを押すとメカの口が開き梯子が出てきて勇樹がいるところへと伸びていった。
「これに乗っていくの!?　もっと近代的かと…」
「持ってきた材料でこれで限界なんだ、我慢してくれ」
　勇樹はそう言いながら梯子に上りメカに入り込む、太田たちも文句を言いながらも梯子に上ってメカに乗り込むと、梯子はメカにしまい込み口は閉じる。

「操縦席は変わっていないね…」
「まぁそこはこだわりないし別にいいじゃない」
太田と幹子はそう言っていると勇樹は「そこは無視しろ」とジト目で言いながらコンピューターを起動する。そして。
「ジェルシードがある場所は、レーダーから登録しているからすぐに行けるぞ！」
勇樹はそう言いながらレバーを動かすと、ブリキンダーは青色の光に包まれるとレーダーがある場所へと転送された。
・・・

太田は『植物が原因』と言っているが、勇樹は「いや違う」と真剣に答える。
「え、植物が原因じゃないって?　どういうこと?」
「その名の通りだ、植物がもしジェルシードによって変化したなら。あたりに影響が出ているだろ」
勇樹はそう言いながら画面を見て言ったためみんなは試しに見てみる、画面に映っている植物は変化なくそのままの状態になっていた。
「確かに、変化がねえな」
「そうだね…待って、もしかして植物じゃないとしたら!」
「人…もしかして!」
伊江と幹子、そして太田は急いで画面を巻き戻してみると、１人の男女がジェルシードに巻き込まれているのを発見する。
「美樹姉!　あの２人って!」
「サッカーのキーパーとマネージャー…ジェルシードは確かひし形の宝石だから」
「なるほどな、新人のなのはが気づくのに遅れが出るのも無理がねえな」
勇樹は幹子に向けて言うと、彼女はさっきのサッカーの２人を思い出して言う。伊江は先ほどの宝石を思い出して言うと太田は「それじゃあ、どこかに」と言いながら画面を見て探し始める。

すると勇樹が「あ、なのはがいた」と言ったため3人は「どこ!?」と急いで探すと、魔法陣を発動したなのはを発見した。
「太田、あれってもしかして」
「エリアサーチ、源である素を探すか本体を探すために使用する…百合子さんから聞きましたよ」
太田の言葉にみんなはジト目で三つ江mて来たため、彼は慌てて百合子の話を出すと、みんなは「あっそ」と言いながら画面を見つめる。
すると、なのはの魔法陣が突然桃色に輝くと無数の光の球はあたりを散らしながら探し始めた。
「さっすがだな、探査方法を独自で編み出したのは初心者でも無理だ。百合子さんでも約5日ほど時間がかかるぞあれは」
「そうだな…それよりも勇樹、こっちも!」
伊江の言葉に勇樹は「わかっているよ」と言いながらレバーを動かした…その時。

ビビビビビビビッ!

『異常人物侵入、異常人物侵入! 危険レベルC型、まだ安全ですが目的のために襲って

きたと思われます。　繰り返します―』

警報音と共にスピーカーからの声に４人は「え?!」と驚く。すると幹子が「あれを!」と右の画面に指をさしていう。

勇樹たちも急いで見てみると、そこには青色をした巨大な鳥型のメカがなのはに向けて突っ込んでいく。

「あいつは…黒薔薇の仲間か!?」

「黒薔薇か…いや、マークがない!　黒薔薇じゃないぞ!」

「妨害する気なのか!?　勇樹君!」

幹子の言葉に勇樹は「わかった!」と急いでレバーを動かす、するとブリキンダーの右腕がドリルに変形し鳥型のメカに向けて放った。

そしてメカの胴体にドリルは突き刺さると、穴が開いたヵ所から黒い煙を放ちながらそのまま墜落行った…と思いきや。

『バード!』

鳥型のメカは体制を整えると同時にドリルによって穴が開いたヵ所からドリルが出てきて地面に落ちると鉄屑が集まり、再び合体する。

そして、羽の一部から刃物が出てくるとブリキンダーに向けて発進していく。

『『ちょちょちょちょちょ!?』』

勇樹たちはそれを見てお通りていると、勇樹は「しまった！」と急いでレバーを動かした。

するとブリキンダーの背中についているロケットブースターが起動するとそのまま上へと発進し攻撃を逃れる…が。

『バアアッド!!』

向きを変えてふたたび発進してきたため、彼は「そんなのありか?!」と慌てて動かして攻撃をかわしていく。

「だめだ！　あいつはオレたちを敵視している！」

「そうだな！　だが、あいつがなのはを襲おうとした理由は1つあった！」

「ジェルシード、それしかないね!!」

太田と伊江、幹子はそう言うと勇樹は「ありえるな！」と言いながら攻撃をかわした。

その時。

『リリカルマジカル！　ジェルシード、シリアルX！　封印!!』

画面からなのはの声がしたためみんなは『どこどこ?!』と慌てて探すと、桃色の光線を放つ大樹に当たるとそのまま光はあたりを包み込み大樹は消えて行った。

「すげー！　わずか短時間で！」
「驚いたよ…あ、メカは?!」
太田の言葉に幹子は「あっち！」と向けて言うと、鳥型のメカはブリキンダーを睨みつけるが、そのままどこかへと去っていく。
それを見た勇樹は「何者だ、あのメカは…?」と目を丸くして言うと伊江は「オレもわからねえ…ただ」と真剣に考え込む。太田も同じことを考えていたのか「どこかで見た姿だ」とつぶやいた。すると。

キィンッ！

「っ!?」
後ろから誰かに見られたのを感じたのか、幹子は後ろについている画面に向けるが、誰も映っていなかった。
「なんだ、さっきのは…?」
幹子は先ほどの視線は一体誰か分からなずじっと見つめていると、勇樹が「それじゃあ帰るか」と言いだした。
「もう夕方だし、この時間帯だと多くの人たちに見られる可能性が高いっと」

「そうだね、なのはさんはジェルシードを確保できたところだし、そろそろ」
勇樹に答えるように太田は答えると、ブリキンダーは例の基地へと転送し、高町家へと帰宅していく。
この時、なのはの表情は少し暗いことに勇樹だけは気づいていた。
・・・

れていた。
「あと少しで終わらせて、出来る限り負担を軽くするか」
勇樹はそう言いながら椅子から立ち上がり移動しようとした…その時。

ドンドンドンッ

『勇樹さーん、少しいいですかー?』
「真莉愛さん?　はーい」
真莉愛が勇樹を呼んできたため、彼は扉まで行き開けると彼女が「どうぞ」とおにぎりを持ってきた。
「わぁ、おにぎりだ。でもどうして?」
「ここのところ、ホワイトナイターの修理をしながら例のあれを組み立ていると陽君から聞いたので、夜食を用意しました」
真莉愛の言葉を聞いて勇樹は「わーい!」と喜びながらおにぎりをもらうとジャンプしながら円を描くように走っていく。
「あ、あとこれも勇樹君に」
何かを思い出したのか彼女は手紙を出して彼に渡した、勇樹は「これですか?」と言

いながら手紙を受け取ると、そこに描かれていたのは『グランツ研究所から』と書かれていた。
「グランツ…研究所？」
「桃子さんから聞きましたけど、どうやら何か機械系を作っていると聞きまして」
真莉愛の言葉に勇樹は「機械…」と小さな声と共に頭のアホ毛が反応する、そして。
「早速ですがすぐに作業に取り掛かります、完成次第すぐに行動が出来るようにしますのでご安心ください、また何か手紙が来たらすぐに連絡をお願いします。そしておにぎりありがとうございます！」
勇樹は早口でそう言いながら奥穂部屋へと行き、真莉愛は「あ、はぁ…？」と目を丸くするのであった。
そして、グランツ研究所の下には『集合時刻、明日の午後２時』と表示されている。

第４話『グランツ研究所と魔法使い、そしてバレた?!』

次の日、勇樹は霊華と連華、百合子と文、そして幹子と一緒にグランツ研究所に行くことになった。

始めて行くところなんで百合子が「地図アプリで探しましょう！」と調べながら歩いたため時間はかかったが、研究所に着いた。

「な、何とか付いたっす…」

「時間はかかったが、ここまで結構長かったな」

「あはははははは…ごめんなさい」

霊華と連華の言葉に百合子は青ざめながら謝るが、勇樹は「百合子さんが原因じゃないよ」と彼女の頭をなでながら励ます。

「しかし、研究所は少し厳重な建物をイメージしていたかと思ったが」

「思った以上に個性的で面白そうじゃないか」

それとは裏腹に幹子と文は研究所を見て感心していた、それを聞いていた霊華も「そう言えばそうっすね」と同意するように答えた。

その建物はまるで会社のような建物で、左右線対称型になっているため正真正銘のシンメトリーと言うほど規則正しい形をしている。
勇樹も「確かに、これは個性的だな」と感心するように言っていた…すると。

「あれ、勇樹さん。みなさんもどうしてここに?」

後ろから声がしたため誰かと振り向くと、なのはとアリサ、そしてすずかがなぜかやって来てた。
「ありゃ、なのはさんにアリサさん。それにすずかさん、どうしたんすか?」
「どうしたんすかって、アタシたちはここに来るようにと呼ばれてきたのよ」
霊華の質問にアリサは答えると、幹子は「来るように?」と言うとすずかが「うん」と答える。
「アミタさんとキリエさんに『面白いのが発見した』と言われたの出来ましたが…勇樹さんもですか?」
「いや、その人たちからではないけど…どうしてきたのか正直分からない」
「正直分からないって」
勇樹の言葉にアリサはジト目で言うと、百合子が「まぁまぁ」とアリサをなだめる。

すると文はなのはを見て何かに気づいたのか「なのは」と彼女を呼ぶ。
「え、文さんどうしたんですか?」
「なのは、質問だがあのフェレットはどこにいるんだ?」
「あー…ユーノ君は家にいます。私が飼っているといっても、研究所に連れて行くのはちょっと」
なのはは戸惑いながら答えると、彼女は「なるほどな、確かにそうだ」と理解するように答える。
「いくら身のこなしが得意な小型性物のフェレットでも、このような研究所に連れて行ったらパチュンとなるな」
「あはははは…」
文の冷静な言葉になのはは苦笑いで答えるが、少し違った感覚を持っている。
そうしていると入り口から「お待たせしました!」「お待たせ―」と赤紙の三つ編みとピンクのロングヘアをした女性がやってきた。
「ようこそ、グランツ・フローリアン研究所へ!」
「なのはちゃんから話は聞いていたけど、本当に個性豊かのＨＫＹね～」
赤髪の毛の女性はしっかりとしておりピンク色の女性は少しゆったりとした口調で言ったため百合子たちは「個性豊かなのはそちらの方では?」と心の中でそう思った。

勇樹は2人の姿を見た結果体は固まり石のように動けなくなった。それを見た赤髪の女性は「あれ?」と目を丸くして彼を見つめる。
「あの、この人固まっていますけど?」
「え!? あ、失礼しました!!」
彼女の言葉に勇樹は我に返るとそのまま百合子の後ろへと隠れていく、それを見た百合子は「ありゃりゃ」と苦笑いで答える。
「あの…勇樹君。研究所に」
「え! わ、わかりました。あみちゃさん、あんにゃいを!!」
百合子の言葉に勇樹は反応するが、顔を赤くし体から汗が噴き出しており頭から蒸気が出ていたため赤髪の女性は「少し、中に入って休みますか?」と言うとみんなは「そ、そうします」と苦笑いで答えた。
・・・

由は勇樹が緊張をしていたためである。
　とは言ったものの、今の季節は5月。まだ暑さが残っており、なのはたちも研究所内に入った途端「涼しい」と穂減んだため百合子たちも「確かに」と納得する。
「それにしてもだけど…勇樹さんって一体なの者ですか?」
　アミタはばてている勇樹を見て言うと、百合子は「そうですね…」と考え込んでいると、それを聞いていた幹子が入ってくると同時に「天才、かな」と答える。
「勇樹君はちょっとした器用な人でね。修理に改造や政策をするのが得意なんだ」
「そうですか、小さいと思っていましたが少し意外な一面がありますね」
　アミタはそう言いながら彼を見ると、勇樹はいつの間にか睡眠していた。
　見た目は少年のような姿をしているが、中身はもしかして立派な大人になっているのではと彼女は確信していた。
　そうしていると勇樹は目を覚まし起き上がると、百合子が「勇樹君、大丈夫ですか?」と心配すると、彼は「ああ、少しは落ち着きました」と答える。
「大丈夫ですか?　少し赤かったですが熱とかは」
「あ、大丈夫です。少し混乱していまして…それよりも話って?」
　勇樹の言葉にアミタは「それなら博士が」と言っていると扉が開くと同時に、男性が入ってきた。

「博士！　どうしてここに」
「いやぁ、なのは君にすずか君とアリサ君に少し聞きたいことがあってね、それで呼んだんだ。そして…君が勇樹君かい？」
　博士と呼ばれた男性は、勇樹に向けて言うと彼は「はい…そうですが？」と目を丸くしていると彼は何か思い出したのか「おっと失礼」と訂正するように言う。
「ボクの名前はグランツ・フローリアン、グランツ研究所の総責任者であり兼所長だ」
「あ、アミタさんから聞きました！　確かロボットに関する研究を」
「おお、それは嬉しいね。君はロボットに興味あるのかい？」
「はい。特に巨大なメカや機械系には興味あります」
「それは嬉しいよ！　機械系に興味がある男子は少ないからね」
　勇樹とグランツのhじゃなしにみんなは茫然としていると、ピンク色のロングヘアをした女性が「ちょっとパパ」とむすっとした表情で話し出す。
「あの話をしなくていいの？　偶然撮れたといっても疑問があったから」
「おっと失礼、それよりもキリエ。呼ぶのは構わないけど人前の時には博士だよ」
　グランツはそう言うとキリエと呼ばれた女性は「あ」と反応する。それを見た百合子は「あらら」と苦笑いする。
「あの博士、その偶然撮れたのって？」

「ああ、実は実験中のドローンを飛行していたところ、少し不思議なのを撮ってね」
勇樹の質問にグランツ博士はそう言いながらリモコンを出しスイッチを押すと、壁についているテレビ画面が起動し映像が映りだされる。その映像には。

白い服を着た少女が巨大な大木に向かって桃色の光線を放った光景。

「ぶっ!?」
それを見たなのはは顔を真っ赤にして驚くと、アリサとすずかは「これって?!」と目を丸くして驚いている。
「は、博士…もしかして」
「なのはちゃんと同じ、ううん。なのはちゃんがどうしているの!?」
アリサとすずかはそう言っていると、勇樹は「あー、ばれたか」と難しい表情をする。
「勇樹君…ばれたようですね」
「うん、こっちはまだだけどなのはさんがね」
百合子と勇樹はそう言っているが、博士は「それだけじゃないんだ」と言うと今度はある映像が映し出される。

それは巨大なブリキ型のメカと鳥型のメカが空中で戦っていた映像。

それを見た勇樹たちは「わひょ!?」と目を丸くすると同時に奇妙な声を出して顔を青ざめる。

「初めて見るメカニックだけど、動きからすると結構スマートでね。初めて見るタイプだね…これ勇樹君知っている―」

博士はそう言って振り向くと、勇樹たちはいつの間にかおらず。逆に『ごめんなさい、急用が出来ました。すぐに終わらせますのでごめんなさい』と書かれた紙が置いていた。

それを見たキリエとアミタは「もしかして…」と言いながら画面を見て数秒後、ある事に気づいた。

これを作ったのは、勇樹ではないのかと

「で、ばれかけたぁ!?　どうしてなの勇樹君?!」
「お、オレも知りたい！ドローンを飛ばしていたのは初めてだ！」
「それよりもなのはちゃんの正体が知られましたよ?!　家族に知られたらどうするんですか?!」
「家族はまだ知られていないっすよ！　問題は友達っす！」
「グランツ博士の権力で知られたらアアアア大変だ、毒薬を」
「そして記憶を消そう」
　勇樹たちの混乱した光景に伊江が「落ち着け落ち着け！」と押さえつける。
「正体は多少知られたが、まだ少人数だろ。まだ少し落ち着かせるようにしたらいいじゃないか?」
「そうです、映像と言っても勇樹君の機械でどうにかできますか?」
「そうだね、映像の一部を変換すれば行けるかもしれないし…ＣＧとか」
　伊江と一緒に真莉愛と幹子はそう言っていると、勇樹は「あー、なるほど」と言いながら冷静を取り戻す。
「それでしたら急いでメカを作ってから行けば」
「それは無理っすね、研究所なので厳重だと思うっすよ」
「そうです、少しは冷静に考えれば侵入不可能です！」

「そうそう、冷静に考えればそうだよ～？」
「ほら、キリエさんとアミタさんがそう言って…どわああっ!?」
キリエとアミタが現れたことに霊華は驚き、みんなは「いつの間に!?」と驚く。
「ど、どうしてここにいるんすか!?」
「どうしてって、後から付けてきたんだから簡単よ？」
「ストーカーですか!?　憲法に触れていますよ!!」
「いえ、敷地に入るときにちゃんとご両親に『勇樹さんに話があります』と言ったらすんなり入りましたのでご安心を」
「そこじゃないが?!」
霊華と京子、小森は驚いているが。キリエとアミタは冷静に解説したため勇樹は「おいおい」とジト目で見て言う。
「それよりも、この奥にあるのが例の機械が」
「そうそう…って入らないで!?」
アミタが入ろうとしたため勇樹は急いで止めるが、キリエが「だーめ」と彼の服を掴んで妨害を制止させる。
そうしているうちに扉は開き、例のメカがあらわになる。

「これが…先ほどの映像に映っていたロボットですね」
「うわぁ、それにしてもこれって結構古そうじゃない?」
　メカを見てアミタとキリエは驚くように言っていると勇樹は「み、見ないで…見ないでほしいです」と言いながら顔を赤くして壁に頭突きしていた。
「もしかして…これ以外に何かあるのですか?!」
「ありますありま……え?」
　アミタの言葉に勇樹は戸惑うように反応すると、伊江が「まじか?」と意外な反応をする。
「まじが付くほど本気です！　どうやってここまで作ったのか気になります！」
「え、えっと…これは持ってきたのを組み立てたんでそこまでは」
「組み立てただけでもすごいですよ！　どこかのプラモデルのようになっていたとしても、動くのはすごいです！」
　目を光らせるアミタに勇樹は戸惑っていると、百合子が「キリエさん、止めたほうが良いですか?」と彼女は「そうだね～」と答える。
「お姉ちゃんはマジメなところがあるけど、何かに感動すると興奮する等に暴走みたいな行動するからね。興奮要注意、ＫＹＴなの」
「興奮…あ、そうですね」

キリエの言葉に百合子は何か理解すると、そのまま「それじゃあ」とカバンからロープを出してアミタを捕まえる。

・・・

「父さんには話しておきますが、あまりみなさんに話さないようにします！」
「だけど～、パパは少し研究熱心だから狙われるかもしないわよぉ？　油断大敵中よ？」
２人の言葉に勇樹は「あははは」と苦笑いすると、伊江たちは「確かに」と思いながらジト目で研究所がある方向へと向く。
「それでは、本日は突然ですみませんでした！」
「また来るかもしれないからね～」
アミタとキリエはそう言ってテントから出ると勇樹は「今度はちゃんとノックしてから入れよー」と答えるのであった。
２人が高町家から出るとテントを閉めて、勇樹は「やっと帰ったかぁ」とため息をした…が。

トントントン

「ん、何か忘れ物したのか？」
外から叩く音がしたため勇樹は扉を開けると、そこで目にしたのはアミタとキリエではなく。

「アリサさんと…すずかさん？」

なのはの同級生であり幼馴染のアリサ・バニングスと月村すずかが、やってきたからだ。

第５話『依頼とお茶会…そして敵?!』

ギンギンギンッ!!　ガンガンガンッ!!

メカ倉庫内から金属音が叩く音が響いていた、その音の正体は勇樹が映像を見ながら何かを作っていた。

その何かとは、先ほどアリサとすずかが「なのはの手伝いをしたい」といった理由で、デバイスを作るように言われたからだ。

しかし彼は機械系では天才だが魔法の知識はまだ覚えておらず、正直うまくできるかどうかは不明だ。とは言った物の、彼女たちの真剣な表情に彼は期待を外さないように精いっぱい頑張って作っている。

「アリサは…元気がいいから電気より炎が似合うな。すずかは冷静だから…水か氷かな？」

勇樹は２人の印象や能力に特性などを考えてながら、専用のキーボードに情報などを入れていた。

そのキーボードについているコードの先には、グローブ型と引き金が付いた鞘がつながっていた。

・・・

伊江は「大丈夫か」と心配するのであった。
　あまりの疲労に勇樹は「大丈夫」と言うが、黒から何かが出かけていたため天女が「少し横になってください」と言われ横になることになった。
・・・

伊江の言葉になのはたちも「うーん」と悩むように考え込んだ…その時。

『ビビビビビビビッ！』

「わわっ！」

突然バッチが何かに反応したのか、警報機が鳴り始めたことになのはは驚きバッチを落としてしまう。

「こ、これってまさか！」

「ジェルシード…そうかこのバッチはそれに反応したのか！」

伊江の言葉に奈々は「それならなっとくします」と答える。

「まだ未完成ですがこれはすごいですね、なのはさんのレイジング・ハートに異常が出たときに使用すると思いますよ」

「そ、それはないよ…でもこれが反応するってことは」

なのはの言葉に百合子は「あ」と思い出したかのように気付くと、天女が「それでは行きますか」と言いながら卵型の大きなリュックを背負う。そして。

「お仕事、開始でございますね」

天女の言葉になのはは「は、はい」と慌てて立ち上がると、すずかとアリサに向けて「ごめんね、少し外す」と言って席から離れる。
２人は「それじゃあ」「わたしも」と立ち上がるが天女が「お待ちください」と彼女たちの肩に手を添える。
「アリサさんにすずかさん、そのデバイスは完成しておりますが現在情報をアップデート中、つまりあなたたちのものである声紋と情報である顔の輪郭を読み込んでいます」
「え、それってどれくらい?!」
「ざっとですけど…１時間ほどですね」
「１時間…思った以上に長いね」
天女の言葉にすずかは驚くと、彼女は「それでです」と言いながらなのはを姫様抱っこしフェレットモドキを背中のリュックに入れる。
「私が飛んでいきますのでなのはさんは」
「あ、はい」
なのはは何か理解したのか応答すると天女は「では」と言った、その時。

シュッ!!

一瞬、何が通ったか彼女たちは分からなかったが。なのはを抱っこした天女が森に向けて走ったことに気づいた。
「天女さんったら、わたくしの次にしていますわね」
「そうなの…ってまさかあのようなのを?!」
「はい、今度やってみますか?」
ほほ笑む奈々に2人は「いえいえ!!」と急いで顔を左右に動かして否定する。
・・・

『にゃああお…』

「え…」
「う…」
「あら、大きな猫さんですね」

５ｍほどある大きな猫であった、猫が苦手なユーノは石のように固まって動くことが出来ず、なのはは大きな猫を見て目を丸くしていた。
「なのはさんユーノさん、あの猫はまさか」
「あ、多分…あの猫の大きくなりたいという思いがジェルシードに反応したんじゃ…ないかな?」
ぎこちない動きでユーノは答えると、天女は「ああ、そう言えばあの猫さん」と彼女は思い出すように反応する。
「ですが、このままでスト危険ですね…なのはさん」
「そ、そうですね…流石にあのサイズだとすずかちゃんも困っちゃうね」
なのははそう言っていると、猫はのんきにあたりを見渡しながら「にゃああお」と鳴く。

「襲ってこないから…ささっと封印を」
「ええ、ではどうぞ」
天女はそう言ってカバンからサングラスを出して装着すると、なのはは「それじゃあ！」とレイジングハートを出した…その時。

ドガアアアッ！

「っ!?　何!?」
「落ちてきた…でも隕石じゃない！」
突然巨大な猫の近くに何かが落ちてきて、２人は驚くと天女が「機械です！」と答えながら武器を手にする。
「姿は分かりませんが、巨大な猫型のメカなのはわかります！　気を付けてください！」
天女の言葉になのはは「は、はい！」と答えると同時に変身し、武器を構える。
すると煙は徐々に晴れていき、そのなにかが露になっていく。その機会とは…。

『ロボーッ!!』

巨大な鉄の玉形の胴体と顔にトゲ付き鉄球とC型のペンチをした手、頭と胴体には無数の煙突が付いた巨大なメカが現れた。

メカは猫を見つめると胴体の砲台が動き、無数の光線を放つと、猫はそれに苦しんでいるのかゆがんだ表情をする。

「あの機械も、どうやら猫を狙っているかジェルシードを狙っているようですね」

「え!?　どうしてなんですか?!」

「理由は分かりません…ですが、胴体のドクロを見れば敵の可能性があります」

なのはの質問に天女は答えながらリュックから無数の銃を取り出す。そして「では行きますか」と武器を構えると同時に走り出す。なのはも「わかりました!」と答えると、彼女の後を追うように走っていく。

『ロボ?』

すると、２人の気配を察知したのかメカは後ろを向くと、２人は武器を構えて走ってきた。

メカは右手についているトゲ付き鉄球を放つと、天女が「させません!」と銃と放ち攻撃をそらす。

「なのはさん、今のうちに!」

「は、はい！」

天女の言葉になのはは答えると同時に空を飛び、攻撃をかわして猫に向かっていく…が。

ドガアアアッ！

「きゃっ！」

胴体の砲台の一部が起動しなのはに攻撃したが、彼女は防御を張る。だが攻撃が強うのか砲台から放たれた砲弾にはじかれて彼女は落ちていく。

天女は急いでなのはを助けようとするが、メカの光線で行動を防いだため彼女を助けることはできない。すると。

ゴゴゴゴ……ドガアアッ！

地面が膨れ上がると同時に巨大な芋虫型のメカが出てきてなのはのところまで行くと、口から網が出てきて彼女を救う。芋虫型のメカを操縦している相手の正体は。

「間に合ったー！　何とか間に合ったぞ！」
「天女さん、わたくしたちも助太刀しに来ましたわ」
「奈々様、勇樹さん！」
　奈々と勇樹の声を聴いて彼女は反応すると、口が開き２人の姿が露になる。
「なのは、オレたちも助けに来た！」
「協力していきましょう」
「は、はい！」
　勇樹と奈々の言葉になのはは答えると、メカは地面に着きなのはは網から外に出る。そして巨大なメカに向けるとメカは『ロボオ』と言いながら勇樹たちに向ける。
　勇樹は「奈々とオレはメカの相手をする、その間になのは急いであの猫を！」と言うと彼女は「わかりました！」と答える。
　そしてメカの口が閉じると目が点滅し、例のメカに向ける。
「それじゃあ、巨大芋虫メカ『ホー・ワーム』で行くぞ！」
『ワーム！』
　勇樹の言葉にホー・ワームは答えると、口から砲台が出てきて砲弾を放つと、砲弾はトゲ付き鉄球の鎖に当たると天女が「今です！」と攻撃をはじくと、そのまま地面に着陸する。

「なのはさん、急いでいってください！」
「わかりました！」
　天女の言葉に彼女は答えると、急いで猫の方に向けて発進していく。メカはなのはを捕まえようとするが勇樹が「させるか！」とホー・ワームの口から巨大なハンドが出てきて動きを封じ込める。
　そしてなのははそのまま猫に向かっていく。
『ロボッ！』
　メカはハンドでホー・ワームに攻撃するが勇樹は「させるか！」と急いで攻撃をかわすと胴体に体当たりし胴体の一部から巨大な蝶の羽が出てくると風を起こし、動きを封じ込める。
「風を起こして動きを封じ込んでいる間に。あのメカの情報を調べる装置で！」
「わかりました、調べてみます！」
　勇樹の言葉に奈々は答えると、彼女は天井に付いているつり革を引くとメカの目から赤い光を放つ例のメカをスキャンする。
「勇樹さんが用意した装置は、現２０６６年から約１０００年以内にメカの情報は乗っています、機械系であれば何とか」
　奈々はそう言って調べていると、画面に『詳細不明！』と表示されるそれを見た奈々

は「ええ?!」と驚く。
「勇樹さん！　このメカは情報詳細が不明です！　もしかしたら黒薔薇のではないかと！」
「そうじゃなくても、目的はジェルシードだというのは分かるっと！」
　勇樹はそう言っていると、メカのトゲ付き鉄球はドリルへと変わりホー・ワームに攻撃する。それを見た奈々は「よけます！」とレバーを動かすとホー・ワームの羽は中に姉妹攻撃をかわす。
「メカも調べてみました、あの巨大メカは『ジャイアントメタルメカ』です。強大な硬さが特徴の機械です！」
「天女さんの攻撃を跳ね返そうだな…もう少し行くか！」
　勇樹の言葉に奈々は「はい！」と答えレバーを動かすと、メカの背中からのこぎりの歯が出てきて巨大メカ『ジャイアントメタルメカ』に向けて攻撃していく。

第6話『ジェルシード封印と仲間…?』

ドガアアッ!!

『ロボーッ!!』

森の中で機械音が鳴り響く中、巨大メカはドリルを出してホー・ワームに攻撃するが。ホー・ワームの背中に付いているのこぎりの歯で攻撃を防ぎ、メカの胴体に体当たりする。

「奈々さん！　情報を詳しく!!」

「はい、操縦士ながらは難しいですので出来る限りでいいですか?!」

「かまいません！」

勇樹の言葉に彼女は「わかりました！」と答えると画面に映し出されている情報を勇樹に伝える。

「情報詳細不明組織、この敵は国際時空管理局でも初めてで詳しい内容がありません！」

「だが、あのメカは資料に乗っていたが『ジャイアントメタルメカ』の可能性が高いな！」

「はい！　ジェルシードをどうして狙うかは置いといて…なのはさんを！」

「わかった！」

奈々の言葉に勇樹はレバーを動かすとコントローラーの一部が動くと長い舌が出てきた。そしてメカの口が開くと舌は伸びていきメカの足に絡ませて進んでいる方向とは逆方向に動く。
「レベルを上げて動きを！　なのはは?!」
「なのはさんは今ジェルシードを…封印しています！」
奈々はそう言っていると、操縦機に付いている画面にはジェルシードを封印して元の大きさに戻した猫が映っていた。
「どうやら、成功したようですね！」
「そうだな…って、あれ?」
操縦している勇樹は何かに気づいたのか、画面を見つめていた。
「どうしたんですか勇樹さん?」
「いや、おかしいんだけど…天女さんに連絡できる?」
「へ?　電話なら…できますけど?」
奈々はそう言いながら電話を出して天女に連絡すると、「勇樹さんから連絡です」と言いながら受話器を渡す。
「ありがと。天女さん質問ですけど、現在メカの動きはどうなっていますか?」
『例の機械はどうやら動きが止まっていますね。起動音は多少しますから動いています

けど…それが?』

「起動音はするけど動かない…しまった、これは罠だ!」

勇樹は何かに気づいたのか奈々に「戦闘中止、急いで逃げるよ!」と言いながら操縦機を動かすと、彼女も「は、はい!」と慌てて操縦機を動かしてホー・ワームをメカから離していく。

「もしかして、ジェルシードを奪うためにワザとこれを?!」

「いや、ジェルシードはもうなのはが封印したからあきらめた。だとしたら」

「…はっ!　操縦者はどこ消えてメカ事爆発する?!」

何かに気づいたのか奈々がそう言った瞬間、突然メカの胴体から眩い光があふれてきてひびが入ってきた、その時。

ドガアアアアアアッ!!!!

突然大爆発が発生し爆風は木々を大きく揺らしたため爆発の威力は強く、ホー・ワームも突然の爆風で前に飛んでしまい地面にめり込んでしまった。

・・・

「ここまでは予想外…あ、天女さんは!?」
『私は大丈夫です、急いで岩陰に隠れたため問題はありません』
天女の応答に奈々は「あ、安心しました」と安心するように答えた…が。
「あ、なのはさんが!!」
勇樹に言葉に奈々は「あ!」と反応すると、天女が『爆風の影響で意識を失っている可能性があります!』と答える。
奈々は「急いでいきましょう!」とレバーを動かすが、地面にめり込んでいるため動くことが出来ない。
「あれ、どうして?!」
「先ほどの爆風で地面にめり込んで動きが取れないんだ!　装甲を壊せば行けるけど、武器は必要ないと思ってすずかのところに置いてきた…奈々は」
「わたくしは電池切れで…ドウシマショウ!」
慌てる奈々に勇樹は「口だけでも動けばいいが…」と言いながらレバーやスイッチをいじるがメカは動くどころが口が動くことが出来ない状態になっていた。
すると奈々は「上なら!」と思い出しいそいで椅子から立とうとした。その時。
シュッ!!　バガアアアン!!!
突然メカの操縦席に亀裂が入るや否やメカは縦に割れて左右に動き外に出れる状態

になった。
　その光景を見た勇樹と奈々は「あわわわわ!?」と言いながら顔を青ざめ、落ちないように椅子にしがみついている。
「な、なんだこれは?!」
「分厚い装甲をいい、いったい誰が」
　２人が驚いているとどこからか「大丈夫ですか」と少女の声がしたため、勇樹は何かと思いあたりを見渡すと今度は「こっちだよ、こっちこっち」と上から声がしたため、２人は「もしかして」と上へと向く。
　そこにいたのは、黒いマントをした金色のツインテールの少女と同じ少女だが白色のマントをした子が空中に浮かんでいた。
「…えっと」
「どちら様ですの…?」
　それを見た２人は目を丸くして言うと、少女は「あ、ごめんね」と申し訳なさそうに答える。
「ジェルシードが反応したから急いできたんだけど、それがあって中から声がしたからつい」
「あ、それは別にいいよ…それよりも茶髪のツインテールをした白い服を着た少女は?!」

勇樹は２人に向けて言うと、今度は「それなら」と背が小さな少女が元気よく答える。
「メイドさんとフェレットが助けてくれたみたいだよ。危ない所だったから心配したよもう」
「あ、天女さんですね」
少女の言葉に奈々は安心したのか「ふぅ」とため息をすると、大人しい少女は「それよりも」とある事を言う。
「あなたたちは大丈夫?　ケガしているような気が…」
「日常茶判事だ、これくらい平気だ…それよりも、お前たちはなのはと同じ魔法使いか?」
勇樹の質問に２人は「うーん」と悩んだ末、小さな少女は「それに、近いかな」と答える。そして。
「それじゃあ私たち少し用事があるからここまで、あなたたちの名前は?」
「名前か…確かに分かれる前に名前は必要だな」
勇樹の言葉に奈々は「確かにそうですね」と答えると。２人は自分の名前を言う。
「オレは石川勇樹、これを作った少し変な発明家」
「わたくしは七ツ星奈々です、あまり知られていませんがちょっとした令嬢さんですの」
「へぇ…あ、私はアリシア。アリシア・テスタロッサだよ。そして」

「私はフェイト、フェイト・テスタロッサです」
２人の名前を聞いて勇樹は「フェイトとアリシアっと」とメモに記録すると、彼は「わかった」と答える。
「少しだけだけど助けてくれてありがとう、今度どこかで会うかもしれない」
「それではまた、ごきげんよう」
勇樹と奈々はそう言ってメカをカバンに入れると、奈々が「天女さんはこっちです」と言って走ったため勇樹は「ま、待ってくれ！」と追いかけていく。
それを見たフェイトとアリシアは「ほけー」と２人を見て戸惑うのであった。
・・・

「それよりも、そのアリシアちゃんとフェイトちゃんって。どんな人だったの?」
「そうね…あたしも気なるわ」
すずかとアリサの質問に奈々は「そうですね」と思い出しながら、２人の姿を答える。
「フェイトさんは少し大人しく、優しいお姉さんですね。アリシアさんは元気がよく、明るい妹ですね」
奈々の言葉にみんなは「へぇー」と目を丸くして言うと、文は「一度見てみたいな」と興味があるように答える。
「それよりも…メカの修理もしないと」
勇樹の言葉に天女は「はい、そうですね」と小声で答えるのであった。
・・・

いった。

第７話『温泉旅館で合流した敵!?』

例のジェルシードから数日後…勇樹たちはメカの修理をしていた、その理由は簡単。二つになっていまったホー・ワームを修理していた。

「ホー・ワームが断面されて時間かかりますか勇樹くん?」

「きれいに切れている…本当に一刀両断だな」

この前の少女、フェイト・テスタロッサとアリシア・テスタロッサによってメカは真っ

「壊れたとはいえ、助けてもらっただけでもうれしいな…」

「そうですね、ですけど後３０分で行きますよ?」

百合子の言葉に彼は「本当ですか!?」と反応すると工具を出して「早く終わらせます!」と言いながら修理をしていく。

それを見た百合子は「あらら」と苦笑いするのであった。

扉の向こうでは、福音と麻子が２人の話を聞いていた。

「麻子ちゃん、なんだかおもしろいことなってきたね」

「うんうん」

それを聞いた麻子は答えると、伊江は「そうだなぁ」と苦笑いするのであった。

・・・

莉愛はメカが入っていると思われるケースを持つとみんなは「わかりました」と答える。
「それじゃあ、勇樹君行きましょうか」
「そうだな、それじゃあ行ってくる」
太田の言葉に勇樹は答え、テントから出るとみんなは「行ってらっしゃーい」と答えるのであった。
・・・

だが、彼は少し違和感を感じていた。その違和感は…。

「ふぅ…（この建物の中にあの時の敵はいたが、初めて見る人を感じたな…誰だ？）」

旅館から感じる何かに彼は察知したが、初めて感じる何かに違和感を感じていた。

そうしていると百合子が「勇樹くーん、なのはちゃーん」と２人を呼ぶ声がしたため振り向くと、百合子の手にカメラが手にしていた。

「せっかくですから写真撮りましょうよー！」

それを聞いた彼は「げっ！」と顔を青ざめるが、なのはは「記念撮影ですか、いいですね」と答える。

「お、オレは後でもいいぞ…何なら明日で」

「え、どうしてですか？　せっかくなのに」

後ろに引く勇樹になのはは質問すると、伊江がやってきて「なのはぁ」とにやにやとした表情で彼女に答える。

「実はあいつ女性恐怖症でな、慣れている人物ならともかく、初対面や少しアレの女性は超が付くほど苦手なんだ…わかる？」

「え、ええ!?」

伊江の言葉になのはは驚くと、彼は「わー！　それだけは言わないでー!!」と顔を赤くしていると、太田が「ごめん」と謝罪しながら彼を捕まえる。

「え、太田?!」

「これも勇樹君のため、基女性恐怖症克服するためだから我慢して」

「う、裏切者おおおおっ!!」

太田の言葉に勇樹は半泣きで訴えるが、百合子は「あきらめてください」とジト目で答えるのであった。

・・・

百合子の指摘に彼はジト目で答えながら受け取ると、彼女は「それじゃあ入って来まーす」と言いながら『婦人の間』に入っていく。
「相変わらずすごい元気だな…」
勇樹は彼女を見なあら答え、自分も風呂に入ろうとした。その時。

「おい」

後ろから誰かの声がしたため何かと振り向くと、自分と同じ身長をした白色のロングツインテールをした少女が立っていた。
「えっと…すみませんが私女性苦手なのですぐに逃げます」
勇樹はそう言いながら逃げようとした…が、彼女が「逃がすか」と彼の襟首をつかむ。その影響で彼は「ぐえっ!!」と引っ張られる感触がすると同時に手にしていた道具を落としてしまう。
ガラガラッ！　ドシンッ！
「痛てぇ!!　何すんだ!?」
「こっちこそ何すんだと言いたいぜ、この前とその前の事件。よくも邪魔したな…」
彼女はい軌道るように答えると、手から長剣を出して先端を彼に向ける。

長剣を見て彼は「なのはと同じか」と真剣に答え、彼女を睨みつける。
「目的はなんだ？　答える内容にオレは変わるが」
「ふん、答える内容か…目的は言いはしないがこれだけは言っておく…邪魔するな」
彼女はそう言うと同時に長剣をしまうとその場から去っていく。それを見た彼は「待て！」と追いかける…が。
ツルッ！　ドシンッ！
「いだっ！」
落ちていた道具を踏んずけてしまい彼はそのまま転んで気絶するのであった。
・・・

「ウガウガ！」

４人の女性は和気藹々と微笑みながら答えていると、向こうから『ギョエッ!!』と太田の声がした。

「太田？　どうしたんだいきなり？」

「何かいたのでしょうか…蛇とか？」

「蛇？　麻子スキー！」

「本物で設楽怖いですが、さすがにこの山までは…」

伊江たちはそう言っていると、太田が『勇樹君、大丈夫ー!?』と声がしたため、百合子は「勇樹君?!」と反応すると、急いで浴衣に着替えて服などをカバンに入れ、外に出て声がしたほうへと向かっていく。

すれ違うようになのはたちが出ると、呆然とする真莉愛たちにすずかは「あの、何かありましたか」と言うと、伊江は「まぁ…少しだな」と答えるのであった。

・・・

「大丈夫ですか!?　廊下で倒れていたから心配しました！」
「百合子さん…オレは大丈夫です」
　勇樹はそう言いながら起き上がると、百合子は「よかったぁ」と言いながら肩の荷が下りる。
「それよりも、どうして廊下で倒れたのですか？　道具が落ちていたのならわかりますが…」
「廊下で倒れた…そうだ、思い出した！　あの時の鳥やロボットなどを操っていた組織の１名と出くわした！」
「え、本当ですか!?」
　百合子の言葉に勇樹は「ああ、本当だ！」と答えると、カバンからスケッチブックとペンを出す。
「浴衣を着ているから何日か前に来た可能性が高い、敵意むき出しだが今のところ襲うことはないよ。でも」
「いつか襲う可能性があるですね」
「ああ」
　百合子の言葉に勇樹は答えると、彼女は「それで、目的は」と言うと彼は「それがわからないんだ」と答えながら何かを描いていく。

「ジェルシードを狙っているのは確かだが、その理由を聞いていないんだ」
「ジェルシードは確か願いをかなえると言いますから…世界征服ですか？」
「オレも思っていたが、それ以外に何か目的が…出来た」
　勇樹はそう言いながらスケッチブックに先ほどの女性の顔を百合子に見せる。
「始めてみますね…なのはちゃんに見せますか？」
「そうだな、一応『スケッチブックに挟まっていた』と言えばなんとなくわかるだろう」
「それじゃあ聞いてきます、あと先頭に入って下さいね」
　百合子はそう言いながら部屋から出ると、それを聞いた勇樹は「はいはい」と苦笑いで答えるのであった。
・・・

再び女性の声がしたため彼は「またか」とジト目であたりを見渡していると、桃色のロングヘアーをした女性が彼を見つめていた。
「オレ、ですか?」
「そうそう、アンタさんだよアンタさん」
「じょ、女難の災い…ああオレはどうしてここまで」
「何言ってんのよ」
黒いオーラ―が出てうなだれる彼に女性はジト目で言うが、「ちょっと聞きなさいよ」と彼の頭を掴む。
「びゃっ！　あ、頭を掴むな!!」
「ごめんごめん、まぁ小さいしちょうどいいかなと思ってね」
「小さい言うな！　これは元々だからな!!」
「ふーん…まぁそれは置いといて、警告を言うよ」
女性はそう言って鋭い目つきで彼を睨みつける、それを見た彼は「け、警告」と言うと彼女は「ああ」と答える。
「これ以上私たちに突っ込むことを気を付けろ、それを破ったら…頭を壊すからな」
脅すように彼女は言うが、彼は「それは、どうだろうな」と言う。
「どういう意味だ、警告だと言っているぞ」

「警告と言っても…それを言う前にオレと同じ背丈をした少女がやってきたから聞いたぞ」
「なっ！　菖蒲菖蒲(あやめ)め…先に来ていたのか」
　女性は菖蒲という少女のことを言うと、彼女は「それだったらすまなかった」と手を放して彼を地面に落とす。
「いでっ！　いきなり落とすな」
「考えていたからだそれとだが、この話は絶対に誰にも話すな。いいな」
　彼女はそう言うとその場から去っていくのを彼は見つめると「そっちが先に行ったじゃないか」とジト目でつぶやくのであった。

第８話『突然の出会い、そして夜の戦い（前編）』

ザバァアアアッ！

「あー、いい湯だなー！」

温泉に浸かって勇樹はそう言うと、周りに声が響く。それを聞いた彼は「これが良いなぁ」とほほ笑む。

「最近テント内に付いているシャワーで済んでいたが、ここも悪くないな…後で専用の風呂場を作るか」

彼らが使っている四次元テントは、シャワーは付いているが浴槽はない。それを感じた彼は道具を使って風呂場を作ろうかと感じたのであった。

勇樹が温泉に浸かっている間、伊江は近くの持ってきた暗ーボックスから出てあるものを出す。

それを見たアリサは「あれ、伊江さん」と反応する。

「伊江さん、それって一体」

「ん、アリサか。これは氷だ、見ての通り普通のだ」

伊江はそう言いながら氷を見せると、彼女は「それは分かりますけど」とジト目で氷を見つめる。
「まぁこれはちょっとしたものを保存するために用意したものだ。やばい物ではないぞ？」
「そ、それならいいわ…それよりもデバイスなんだけど『データーが完了しました』と表示されているけど、これは大丈夫なの？」
アリサはそう言ってデバイスを見せると、伊江は「この情報は…」とデバイスを見て数分後。彼女は「確か、資料によると」と言いながら近くに置いていたバックから『オリジナルデバイス情報と資料』と書かれた本を取り出す。
「あった『この状態は本人の情報が完了したため、あとは服装をイメージすれば全の完了です』って…全工程ってなんで？」
「あたしも知りたいわよ、それでそのイメージをするのにどれくらいかかるの？」
「確か資料には…1分程度か『衝撃波が多少発生するがそれは一だけで、あとは風が少々出る程度です』…だって」
伊江の言葉にアリサは「何よその話」とジト目で言うのであった。
・・・

はがやってきた。
「あ、勇樹さん」
「おっなのはにユーノ、温泉どうだったんだ？」
「気持ちよかったです、家族で入るのは久しぶりでした。ユーノ君は…」
なのははそう言いながらユーノを見ると、小動物なのになぜか固まっていた。そして顔が赤い、それを見た彼は「あー、もしかしてか」とにやけながらユーノを見る。
「ま、小動物でも少しは照れるところあるな。喋れるのはどうかは不明だが、元気でいいぞー」
彼はそう言いなあらユーノをなでていると、なのはは「にゃはははは、そうだね」とほほ笑んだ。すると。

「はーい、おチビちゃんたち」

女性の声がしたため何かと声がしたほうへと向くと、オレンジ色のロングヘアーをした女性が紅葉模様の浴衣を着ていた。
女性は彼女と彼を見つけるとそのまま駆け寄り、勇樹を見つめる。そして。
「君は確か、フェイトが言っていた例の少年か…小さいけど本当なのかな？」

女性の言葉に勇樹は「ち、小さいていうな!!」と顔を赤くしていると女性は「おっと、ごめんごめん」と謝る。
「んで、その子が確か」
「わ、私…ですか?」
「そ、一応アリシアから聞いたけど。あんま賢そうで強そうには見えない、ただのガキンチョに見えるね…」
女性は今度はなのはを見て言うと、勇樹が「おい小さいというな!」と憤るように怒っていた。
「あ、アリシア?」
「そ、まぁあたしのちょっとした使い魔みたいなものだよ。フェイトも同じだよ」
「フェイト…あ、フェイト・テスタロッサ?」
「あそっか、そう言えばアンタも一緒にいたんだ。フェイトとアリシアから聞いたけど…魔法使いと科学者って本当かい?」
女性の言葉に勇樹は「え、まぁ科学者だけど魔法使いじゃないよ…」と言いながらなのはを見ると、彼女も「うんうん」と首を上下に動かす。
「って、それよりもアンタの名前は何だ?」
「あ、ごめんごめん。アタシはアルフ。さっき言った通りアリシアとフェイトの使い魔

なんだ」
「アリシアとフェイト…」
「家族と来ているかな？」
　勇樹となのははそう言っていると「勇樹くーん」と太田がやってくる。
「太田、どうしたんだ？」
「うん、実は少し調べてみたんだけど。ここから北４５０ｍ、西３００ｍに…って誰ですかその人？」
　太田はアルフを見て言うと、なのはが「実は」と説明していく。
「なるほど、つまりそのフェイトさんとアリシアさんのお友達、みたいな関係を持っているのですか？」
「んー、まぁ簡単に言えばそうだね」
　太田の言葉に彼女はそう答えると、彼は「使い魔って一体…」とジト目で見ていた。
　すると勇樹が「それよりも、あれは」と言うと彼は「あ、ごめん」と慌てて続きを話す。
「姿は不明だけど可能性は約９割方、今夜あたりに行こう」
「わかった、例のあれは」

「ちゃんと持ってきているよ！　氷を大量に入れたからそんなに溶けていないから安心してね！」
「よし、それじゃあなのは、助っ人としていくよ」
「はい！　え、助っ人？」
「お手伝いだ、簡単に言えばサポートをするってことだ。この…フェレットだけだと少し心配するからな」
「あ、はい！」
　勇樹の言葉に彼女は返答すると、彼は「それじゃあ太田、用意しておいてくれ」と言うと、太田は「了解です！」と言いながら奥へと歩いていく。走るのはいけないことだと分かっているようだ。
「それじゃあアルフ、オレたちはこの辺で」
「フェイトちゃんとアリシアちゃんによろしくお願いします」
　２人もそう言って離れていくと、彼女は「うーん」と考えるように悩んだ末、彼女はこう呟いた。

「まさか、ジェルシードを狙うのがいたとはね…」

・・・

た。
「それよりも、なのはさんはどこにいるのですか？」
「そう言えば、勇樹君も見かけないわね～、いったいどこにいたの？」
２名の言葉に太田は「あー、それなんですが」と言いながら目をそらしていた。
それを見たグランツは「おや？」と反応し彼を見つめていた。何か隠しているのだと。
・・・

百合子の言葉に彼は「わかった」と言いながらそれらを置いて離れる。カバンからスイッチらしきものを出すのを見た百合子も、急いでその場から離れる。
「うまくいきますか？　結構難しいと思いますが」
「冷凍していたら可能性は少し上がると思うよ。多分だけどねっ！」
百合子の言葉に勇樹はそう言いながらスイッチを押すと、氷菓から突然水色の雷が発生し空中に浮かぶと同時に、突然大きくなり始めた。
徐々にお菊なっていき、気づいたときには５ｍほどある巨大な評価へと変わっていた。しかしその氷菓の表面をよく見ると、金属で重ねたような跡が残っていた。
「うわっ、凄いですね…」
「あとはこれを急いで組み立てよう、いつジェルシードが発動するか分かりませんから―」
勇樹が言いかけたその時、彼らの携帯が突然ブザーが鳴り始めた。
「うわっ！　これってもしかして」
「ジェルシードの反応！　先ほどのあれに異常が出たのか！」
勇樹はそう言うと、百合子が「先に行ってきます！　勇樹君は急いでメカを！」と言いながらカバンから頬気を出すと彼は「わかった、くれぐれも気を付けて！」と答える。
そして彼はカバンから工具箱を出すと、巨大な氷菓に向けて走り出し何かを作り始め

た。

・・・

「名は覚えた、お前が狙っているのはあれか？」
　彼はそう言いながら川を見て言うと、彼女は「うん」と答える。
「ただし、願いをかなえるために奪うことが目的ではない。悪用されないように封印するために来た」
　彼女の言葉に彼は「そうか…ならば」と言いながら腰にしている剣を出して先端を彼女に向ける。
「お前が封印するなら、我らが奪う！」
「はっ、まぁ私も同じだ。名瀬さんは…あれ？」
　騎士の言葉に同意するように彼女は長剣を出すと同時に名瀬に向くが、彼女はいつの間にか消えていた。
「ったく、名瀬さんはどこに行ったんだ？」
「後から来る者の相手をするだろう、すぐに来る」
「ふーん…ま、足止めしてくれるとしたら後輩としては嬉しいな」
　彼女はそう言うと同時に川に飛び込む、それを見たフェイトは「待て！」と行くが。
「邪魔はさせん！」

騎士が剣を使って彼女に攻撃するが、フェイトは手にしていた鎌で彼の攻撃を塞ぐ。

ガギイイッ!!

「ふっ！」

「むっ！　やるな」

騎士は彼女を見て言うと、フェイトは「そちらもですね」と答える。

第８話『突然の出会い、そして夜の戦い（後編）』

「この先に行けば間に合うはずですが…あ、なのはちゃん」

百合子は箒を使って空を飛んでいると、地上ではなのはが百合子と同じ方向に走っていることに気づく。

服装が魔法少女の姿をしているため、暗い所でも多少目立つ。

「なのはちゃん！」

「あ、百合子さん。勇樹さんは」

「事情で少し遅れるそうです。それよりも急いでこっちに乗ってください」

百合子の言葉になのはは「それじゃあ」と急いで乗ると、そのまま例の場所へと行く…が。

「待て」

空中から突然桃色のロングヘアーをした女性が出てきたため、彼女は「うわわっ！」と急停止する。

「あ、あなたは…誰ですか？」
「誰ですかか…初めてだから話すか、私は名瀬だ。『セレクト・スイッチ』の一員…と言ったほうが良いな」
　名瀬という女性に百合子は「セレクト…スイッチ？」と目を丸くしている。なのはも「初めて聞くような…？」と反応をする。
「お前の目的はジェルシードか？　それだったらちょうど今仁志と菖蒲がやっている」
「仁志と菖蒲…まさか仲間!?」
「ふん、そうだ。だがこの先は私が妨害する。絶対にだ」
　名瀬はそう言うと、同時に両手にしているグローブを合わせると手は赤くなり手のひらから赤い液体が出てきた。
「そ、それって…溶岩!?」
「ああそうだ、しかも出来立ての熱い溶岩だ！」
　彼女はそう言って百合子に向けて殴るが、なのはが桃色のシールドを出して攻撃を防ぐ。
「ぐうっ!!」
「なのはちゃん!?」
　彼女の表情を見て百合子は驚くと、名瀬は「至近距離で塞ぐ、少女にしてはやるな！」

と答えるが。
「いつまで耐えれるか面白そうだな！」
名瀬はそう言いながら再び殴ろうとした…その時。
『どりゃああっ!!』
ドガアアッ!!
突然、巨大な氷のキューブが彼女に当たると、名瀬は「ぬぅ?!」と驚きそのまま氷にぶつかる地面にぶつかり、その衝撃で木々は折れる。
「これって!?」
「勇樹君ですよ、何とか間に合ったんですね！」
それを見たなのはは驚くと同時に百合子はあたりを見渡すと、巨大なアイスクリーム型のメカがやってきた。
「これって何ですか?!　大きなアイスクリームのような…」
「アイスクリーム型の巨大メカ『スーパーアイアンアイスロボ』です！」
百合子がメカの説明をしていると頭のハッチが開き勇樹が出てきた。

「百合子さん、大丈夫でしたか!? なのはさんも！」
「私となのはちゃんは大丈夫でした！」
百合子はそう言うと勇樹は「よかった」と安心する…が。

ドガアアアアアアッ!!

突然氷が爆発すると同時に名瀬が出てきて彼らを睨みつける。
「げっ、あの氷結構重いのに壊した!?」
「うわぁ、これはすごいです…」
それを見た勇樹と百合子は驚いていると、名瀬は「今のは痛かったな…」と答える。
「彼女はオレが何とか食い止める、その間に急いでなのはたちは」
「はい」
「わかりました」
勇樹の言葉に百合子となのはは答え、彼は中に入ると同時にハッチを閉める。
そしてメカの右腕に付いているソフトクリーム型のドリルが起動し、それを彼女に向ける。
「なのはちゃん、少し早めで向こうに行くけど。空は飛べる?」

「はい、飛行可能ですが一緒に行けるかどうかは」
百合子の言葉になのはは答えると、彼女は「わかりました」と答え箒からハンドルが出てきてそれを掴む。
「勇樹君」
『はいよ、インカムは順調だ。話は聞いたから分かったぞ』
インカムから勇樹の声を聴いて彼女は「さすが勇樹君！」と答える。
「それじゃあ…オン!!」
百合子がそう言うと同時にメカの口から白い蒸気が出ると同時にドリルが放たれるが、彼女はそれを「ふんっ！」と殴り壊す。
しかし、ドリルが壊れた影響で白い蒸気が出てきて視界を眩ませる。
「なっ！　これは?!」
蒸気を見て名瀬は驚くと、上から何かが２つ通り過ぎる音がした。それを聞いた彼女は「これは囮か!?」と気付く。
「くそっ！　だがすぐに―」
彼女はそう言って急いで走るが、氷のキューブが落ちてきて前を塞ぐようにしていく。
『お前の相手は俺だ!!』

勇樹はそう言うと同時にアイアンアイスロボの頭から大型のゴングが出てきて戦闘態勢へと変わる。
「ふっ、こいつが私の相手…ならやるか！」
彼女はそう言うと同時に拳を構え、勇樹のメカである『スーパーアイアンアイスロボ』を戦うことになった。
・・・

菖蒲の言葉に彼は「そうか」と答えると、再び彼女に向けると同時にこう言った。
「どうやらもうすぐ終わるようだ。お前たちの仲間は名瀬がやっているから来るのに時間がかかりそうだ」
「っ！　私たちの仲間って、まさかアリシアとアルフが?!」
「それは分からん、だがその可能性はあるな」
仁志はそう言うと同時に刀で跳ね返すと同時に後ろに引き下がると、例のアメフト型のメカに乗り込む。
菖蒲も「回収完了！」と同時にジェルシードを入れたカプセルを持ち運び、メカの中に入り込む。
「待てっ！」
フェイトは急いで取り返そうとしたが、アメフト型のメカが起動すると同時に右腕が降り落ちて、ぶつかろうとした…が。
「「ふっ!!」」
シュッ！　ドガアアアッ!!

アームが落ちる前に何かがフェイトを救ったため、攻撃は当たらず地面にぶつかって亀裂が走る。
「な、何が…？」
突然の行動にフェイトは驚いていると、女性が「間に合ってよかった」と安心しそのまま地上へ着陸する。
「あなたは…？」
「あ、突然でごめんなさい。私は百合子・ビューティーです。私は機械系の魔法使いですがこの子は正真正銘の魔法使いです！」
「高町なのは、初めまして。あなたの名前は？」
百合子となのはの言葉に彼女は「わ、私はフェイト。フェイト・テスタロッサ」と答える。
「初めましてフェイトさん、ですが今は」
「うん、今はこれを止めることが優先だね」
フェイトはそう言って立ち上がると、なのはは「そうだね」と答える。
相手はアメフト型のメカ、どうやって動いを止めることが出来るかはわからない。
「突撃固めなら体系で行きましょう。相手はいくら強くて大きくても
「足を壊すか地面を崩し、そこでバランスを崩せば」

「私たちが勝てる、だね」
　百合子に続いてフェイトとなのはは答えると同時に武器を構える。アメフト型のメカもそれに対抗するように構える。
「攻撃をかわすのは行けます、フェイトさんは私の後をついてください」
「はい、足を壊してやるならいけます。ですが攻撃を塞ぐには目をくらまさないと…」
「目くらましなら私に。デバインシューターで攻撃をすれば」
　３名はそう言うと同時に百合子は箒を起動させるとそれに乗ると同時に、方向をメカに向ける。そして。
「それじゃあ、攻撃開始です!!」

　百合子の合図とともに彼女たちは空を飛び、メカに向けて行くと。アメフト型のメカは右手で彼女たちを掴もうとした…が。
「させません!」
　なのはがデバインシューターを放ちメカの攻撃を防ぐと、衝撃で手の動きは鈍くなった隙をついて百合子とフェイトはメカの右足へと降下していく。
　すると足から無数のミサイルが出てきてフェイトと百合子に向けて放っていく…が。

「かと思いました！　これでどうですか!!」
百合子はそう言うと同時にカバンから飴玉を出して投げる、ミサイルは飴玉に当たると同時に突然飴玉は膨らみミサイルを包み込んだ。
そしてミサイルは爆発するが膜は割れずそのまま上へと上昇していく。
「今のうちですフェイトさん！」
「わかりました！」
フェイトは答えると同時に、手にしていた鎌でメカの足に攻撃した。
「やあっ!!」

スッ!!　バガアアンッ!!

足に向けて鎌をふるうとメカの足は横に切れて一部はそのまま倒れる。
メカは突然の切断に耐えれず、そのまま前に倒れる。フェイトと百合子はよけたためメカには当たらなかった。
「倒れた！」
「今のうちに2人を!!」
なのはとフェイトはそう言ってメカに近づくが、百合子が「待ってください！」と慌

てて２人の動きを止める。
「百合子さん!?」
「どうして前に！」
「もぬけの殻です！　こうしてくることを考えてこのメカを囮にしたようです」
　百合子はそう言って頭まで近づき、カバンからフープを出してつけると同時に中に入る。
　操縦席まで行き何もないことを確認すると百合子は「やはりでしたか…」と反応し、なのはとフェイトに伝える。
「もういないんだ…早いね」
「でもどうして大きな機械で来たのかな…？」
「それなんですが、もしかしたらおとり用として用意したのかと…私の推測ですが」
　百合子はそう言っているよ、彼女がしているインカムから勇樹の声がする。
・・・

「はい、こちらも少し大変なことになりました。ジェルシードは奪われてしまい敵だと思う人に逃げられました…でいいですよね？」
「はい、間違っていません」
　フェイトと百合子の言葉に勇樹は『そうですか』とうなだれるように答える、が。
『だけど敵の手掛かりがあったぞ。メカの装甲を見てみたら何かしらのマークがあった。そっちは？』
「あ、２つありまして。まずフェイトちゃんと出会いました」
『フェイト…あ、そのこにインカムを渡してくれないか？』
「わかりました。あ、フェイトさんこれを」
　百合子はインカムを外して彼女に渡すと、フェイトは「あ、ありがとうございます」と答えながらはめ込む。
『もしもしフェイト？　声聞こえているか？』
「はい、聞こえています…もしかしてその声って」
『おー、俺だよ俺、石川勇樹』
「やっぱり！　どこかで聞いたことある声だと思ったらまさかあなたでしたか！」
　フェイトの表情に百合子は「なんだか少しうらやましい」と言いながら頬を膨らませていると、なのはが「あの、フェイトちゃん」と慌てて話を訂正する。

「そろそろあの話をしたら…？」
「あ、忘れていました…手掛かり難ですが、騎士と小さな人が2名いました」
『小さな人？　騎士ならともかくその小さなのは初めて聞く…。でも重要な手掛かりなのでありがとう。それ以外に何かある？』
「そう言えば、相手の機械がありましたが中はいませんでした。ですが機械はまだあります」
『もぬけの殻か、それだったらちょうどいいな。ありがとう』
　勇樹は『後でそっちに来るから待っておいてくれ』と言ってから数分後、勇樹が走ってやってきた。
「こ、これが例のメカか…疲れた」
「はい、何か手掛かりがあればいいですが…今はこれをどうにかしましょう」
　なのははそう言いながらメカを見ると、百合子が「それなら勇樹君。あれを！」と言うと彼は「そうですね」と言いながらカバンから懐中電灯を出して緑色の電池を入れる。
　そしてそれをメカに向けて光を放つと、大きなメカは少しずつ小さくなっていき。気づいたときには手のひらサイズの大きさにまで縮んだ。
「これくらいならカバンに入れるな」
　勇樹はそう言いながらメカをカバンに入れるのを、フェイトとなのはは目を丸くして

いた。
それに気づいた百合子は「あれ、フェイトさんになのはちゃん？」と声をかけるが、２人は固まったままで百合子は勇樹に話すと彼は「あー」と２人を見て数秒後…。

「一応旅館に運んでおくか」

旅館に運んでなのはは例の部屋、フェイトは勇樹たちのところへと移動して寝かせることになった。

・・・

「そうだな…もうすぐ亜空間を抜くぞ」
仁志の言葉に菖蒲は「あいよ」と答える。
彼らの目的は一体、そしてジェルシードを集めて何をするのだろうか…。

第9話『手掛かりはマークとデバイス、そして警報』

次の日、なのはたちは温泉から帰っていき学校に通っていくが、勇樹たちは『名瀬』と名乗る女性によって壊れたメカ『スーパーアイアンアイスロボット』の装甲に残された跡を調べている。

「おお、装甲に残っているな」

「マグマのように熱いですから溶けていると思ったが、装甲が冷えていたからすぐに固まったな」

勇樹と小森はそう言いながら装甲を見ると、三角形の形をした図形に大小の２つの円形が付いており、変わったマークをしていた。

「珍しいマークだな、小森知っているか?」

「初めて見るな…百合子から話を聞いてみる」

小森の言葉に勇樹は「わかった」と答えると。彼はカバンから火ばさみとバーナーを出していく。

「オレはこのマークを調べてみる、指紋が残っていたら型を取ってみる」

「わかった、こっちもあの魔法使いみたいなやつとメカを調べてみる」

２名はそう言いながら調べ始めた。

勇樹は型から２０センチ離し、バーナーで丸い淵を型を取ると火ばさみで一部を掴んで引き抜き、それを水が入った水槽に入れて周りの熱を取る。

十分冷えたと思い水から出すと、それを装置で書画カメラに置きそれをＰＣにデーターを取り込んで指紋を読み込んでいる。

「これなら何とかわかるかな…」

勇樹はそう言いながらデーターを入れると同時に、カバンから巨大な用紙を出していく。

「海鳴市の情報は書店を探し、そこから調べてみるか」

彼はそう言いながら指紋をＰＣに指紋のデーターを入れ終えると、書店へと行く。

小森には「書店に行ってこの街の情報を入れてくる」と言ってきた。

・・・

「少しは協力できると思いましたが、さすがにこれは初めて見ます」
「気にしなくてもいいぞ…しかしこれは何のマークだ？　フローリアン博士かなのはたちに聞いてみるか」
　小森はそう言いながら移動していくと、勇樹が「書店に行ってこの街の情報を入れてくる」と言ってきた。
「それは構わないぞ…指紋は？」
「出た出た、ただ国際時空管理局に送らないと分からないから、情報を探し次第データーを送る」
「そうか、分かった」
　小森はそう言うと勇樹は「んじゃ」と言いながらテントから外へと出る。
「あれ、勇樹君は何しに？」
「情報を入れてくるってさ、きっと地図に情報を入れる用意をしているだろうな」
「なるほど」
　小森の言葉に百合子は感心し、彼女は「あ、私はなのはちゃんに聞いてみます」と急いで外に出ようとした。その時。

「あ、百合子さん」

扉の前になのはとすずか、そしてアリサが立っていた。それに気づいた彼女は「あ、なのはちゃんにみんな？」と目を丸くしている。

・・・

百合子はそう言うと、アレンが「おや、何話しているんだ?」とやってきた。手には本らしきものを手にしている。

「アレンさん、実は―」

百合子はアレンに例の話をすると、彼女は「なるほど」と納得する等に答えると「それじゃあ」とカバンに本をしまうと同時に彼女はこう言った。

「訓練でもするか? 衝撃波を少し調べて改善すると同時に簡単な武術を教えるが」

アレンの言葉に4人は「え、ええ?!」と目を丸くすると同時に驚く。

・・・

「遅くなってすまない。『衝撃波検査装置』を探していたら少し遅れた」
「いえ、こちらもこの光景に驚いていました」
　謝るアレンにすずかは慌てて言うと、彼女は「そうか」と答えると同時に、アンテナが付いた装置を地面に置きスイッチを押して何かを起動する。
「衝撃波はどれくらいか分からないが、この装置で鑑定できるレベルでやってみる。いつでもいいぞ」
　アレンはそう言うとすずかは「わかりました！」と答える。そして。
「それじゃあ行こう、アリサちゃん」
「わかったわよ、すずか」
　２人はそう言ってデバイスを手に平に乗せて起動させる。

「スノーホワイト、起動して！」
「フレイムアイズ、起動するわよ！」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．　Ｓｅｔｕｐ！』
　２人の言葉に合図するようにデバイスが反応すると、突然地面に空色とオレンジ色のミッド式の魔法陣が出てきて空色の光とオレンジ色の光に２人は包まれる。

ピピピピピピピピ…

すると衝撃波反応装置が反応し、メーターはわずかだが針が動いていた。
「これで反応するとは…少し驚いたな。そろそろ変身してもいいころだがどうだ？」
アレンはそう言うと光は収まると、魔法少女の姿へと変わった2人が出てきた。
アリサは動きを重視したスタイルで髪型は変わっていないが手にはフレイムアイズを手にしていた。逆にすずかは援護防御を重視したスタイルで、髪型は紙の一部をロングポニーテール風にし片手にはスノーホワイトのデバイスをしていた。
「ナニコレ、凄いじゃない！　これ勇樹が作ったの!?」
「私たちらしい姿…なんだか気に入りそう」
驚くアリサに対しすずかは感心するように言うと、デバイスが起動し声がした。
『おう！　お前が確かアリサか？』
『初めまして、スズカ。わたくしはスノーホワイトですわ』
「デバイスがしゃべった!?　まさかこれって」
「勇樹さんの仕業、だね」
デバイスの言葉に2人はジト目で言うと、アレンは「ふむ、なかなかいいところだな」

と感心するように答えた、その時。

『ビビビビビビッ！』

「この警報音、もしかして!!」

突然鳴り響く警報音にアリサは反応すると、天井とデバイスから『警報！　警報!!』と声がする。

『ジェルシード反応アリ、ジェルシード反応アリ。このジェルシードは危険率が高いためすぐに封印を』

声と同時にデバイスから出てきた警告文を呼んだアリサは「き、危険率!?」と驚く。

「ちょっと何よこれ?!」

「初めてだ！　危険率が高いということは乱暴になる…と言う事か?!」

アリサの対応に彼女は驚いていると、すずかが「それよりも急いで止めないと！」と言うとなのはは「そうだね！」と答える。

「アレンさん、勇樹さんは確か外にいますよね!?」
「あ、ああ。確か書店に行くと…そうか彼に頼んで！」
アレンはなのはの言っていることがわかったのか、急いでカバンからドアが付いた鳥居を出しそれを付けて扉を勢い良く開けて入っていく。
「そうだ、アリサにすずか。今回の訓練はいったん中止だ、少し私はなのはと一緒に勇樹のところに行く。それじゃあ！」
彼女はそう言ってなのはと一緒に扉に入ると鳥居は消えて2人は茫然と立っていた。
「よいしょっと、あの…大丈夫ですか?」
茫然と立っている2人に百合子は心配するように言うと、すずかは「あ、私は大丈夫です」と言うとアリサも「あ、アタシも」とぎこちない言葉で答えるのであった。
・・・

と。

ピッ！　バシュウウウッ!!

ボールが縦に割れると同時に白い煙が放たれ、海鳴町を包ようにに煙は当たり散らばっていった。

「さ、博士の作戦通り。行くか？

「そうだな、急いでいくか…」

２人はそう言ってビルから飛びリルトそのままある場所へと走っていく。

第１０話『謎の組織との戦い、そして雷の魔法使い…』

アリサとすずかがテント内に入っている間、勇樹は外で買い物をしていた。
買い物をする理由は簡単、書店に行って地図を購入しに行っていたからだ。
「確かこの先に書店が…」
勇樹はそう言いながら書店を探していると「勇樹」と声がしたため振り向くと、フェイトとオレンジ色の紙をした女性がやってきていた。
「フェイト！　それと…あなたはこの前の」
「お、久しぶりだね。アタシのこと覚えているのかい？」
「温泉であった時から覚えていますよ…フェイトところで彼女は？」
勇樹はフェイトに質問すると、彼女は「アルフだよ」と答える。
「アルフは私の使い魔で、初めてのパートナーなんだ」
「そうそう！　まぁ簡単に言うと、フェイトはあたしにとってご主人ってことかな？」
「ふーん、パートナーとご主人関係か…あれ」
フェイトとアルフの行動に勇樹はある事を思い出すと、フェイトは「どうしたの？」と反応する。

「考えてみると、アリシアは一体？」
「あ、アリシアならお母さんと一緒にいるよ」
「そうそう！　まぁ明日は学校に行く準備をしているからね」
「あ、なるほど…って姉妹関係あるのか」
　勇樹の言葉にフェイトは「あう」と反応すると、勇樹は「ごめん」と謝る。それに対してアルフは「あー、気にしないほうが良いよ」とジト目で答える。
「フェイトとアリシアって、意外と性格があべこべだから間違える人がいるんだ。姉妹も少しね」
「なるほど姉妹もか…姉妹？」
　アルフの言葉に勇樹は疑問を抱いた…その時。

　ドガアアアアアアッ!!!

「「!?」」
　突然向こうから何かが爆発する音がし、３人は驚くと、彼が腕にしている腕時計から『緊急事態発生！』と表示される。
「これって…あ、フェイト。オレ少し用事が出来たから。またな」

勇樹はそう言いながら離れていくと、フェイトは「あ、ええ?」と目を丸くして茫然と立ち尽くしていた。

ある建物の裏路地、勇樹はそこに入っていくとカバンから大量の家電製品を出してスイッチを押すと。家電製品は空中に浮かび始めると同時に合体し始める。

それを見た勇樹は、カバンから携帯電話を出すとある人物に連絡をする。

「もしもしオレだ…あ、ごめん。石川勇樹だ綺羅」

『わかっていますよ』

電話越しから綺羅があきれる声が聞こえると、彼は「ごめんごめん」と謝る。

『まったく…それよりも少し事件発生です。今海鳴市に例の敵が』

「あいつらが現れたか、万が一のことを考えて巨大メカを用意して正解だ。なのはは?」

『アレンと一緒に行きました、もうすぐ来ると思いますが』

綺羅との連絡を聞いた勇樹は「わかった、急いで用意したらすぐに行く」と答えると、電話越しから『ええ、わかりました』と答えると同時に電話を切る。

「さて、こっちも急いでいきますか」

勇樹はそう言いながらあるものを見て言う、そのある物とは。

胴体はドラム式洗濯機でしっぽは電球、電球の付け根にはプロペラが付いておりドラム式洗濯機の又関節は卓上スタンドで足は冷蔵庫。
顔はテレビ画面その下は掃除機が付いており、ドラム式洗濯機の左右にはドライヤーが１つづつ付いている。
「さて、急いでいくぞ『家電バードメカ』！」
『バード!!』
勇樹の声にメカは答えると、頭からマジックハンドが出てきて彼はそれに捕まると、一気にコックピットまで移動し椅子に座り込む。
「エンジン・システム・コントロールは異常なしか、それじゃあ！」
勇樹はそう言いながら赤色のレバーを動かすと、ドラム式洗濯機から羽が出てくると同時にドライヤーから火が噴き出すとメカは飛び始め、ある場所へ突進していった。
・・・

アレンはそう言うと勇樹は『その通り！』と答える。
「そう言えばなのは、結界は」
「それがユーノ君が『ボクがはる前に起動していた』と」
「先客？　だとしたら一体…」
なのはとアレンの言葉を聞いた勇樹は『魔法使いか誰かの仕業か？』とつぶやくと、レーダーに何か反応したのか警報音がなる。
「勇樹、この警報音は！」
『近いな、なのはは』
「私も同じです。ですが音ではなく何かに反応が…あ！」
なのははある方向に向くと、２人んも急いでなのはが向いている方向へと向く。
するとそこにあったのは、水色に輝く１筋の光が空へと続いていた。
「あの光は！」
「ジェルシードか！　勇樹！」
『囮に任せとけ！　アレンはなのはと一緒に！』
勇樹の言葉に彼女は「わかっている！」と答えると、背中から４本のアームが出てきて、アームの間から膜が発生し飛び降りるとモモンガのように空を飛ぶ。
なのはも急いで魔法で空を飛びアレンと一緒に光の方へと飛んでいく。

・・・

シャチ型のメカが突然口を開くと砲台が出てきて、胴体から装甲が動きミサイルが出現する。
それを見た勇樹は「え…まじ」と青ざめて操縦機を握っていた。そして。

ドガアアアアッ!!　バシュシュシュシュッ!!

「ちょっとタンマタンマタンマあああっ!!?」
砲台から放たれる光線と無数のミサイルに勇樹は家電バードメカを方向転換し逃げていく。光線はよけることには行けたがミサイルは追跡機能が付いているためよけても後を追っている。
「いくら何でも限度があるだろうがああっ!!」

勇樹はそう言いながら逃げていた。その時。

「はあああっ!!」

スパッ!!　ドガアアアアアアッ!!!

突然何かの声がすると同時にミサイルは２つに割れ、空中で大爆発を起こした。

その音と爆発に勇樹は「へ!?」と驚いていると、上から『もしもーし』と声が聞こえた。

「え、はい…？」

勇樹は一体誰だろうと思い後ろにある梯子へと行き、上へ上りハッチを開けた。

そこにいたのは、キリエ＝フローリアンとアミティエ＝フローリアンであった。

「大丈夫でしたか!?　結構すごい量でしたけど！」

「安全だったら教えてね、ＡＤＯよ？」

２人の姿に勇樹は「……え、なんでその姿をしているのですか!?」と驚く。

「そ、その前に魔法どか話していませんけどどうして?!」

「え…あ、これ実は博士に頼んで作った物で」

「魔法の力を再現するのは難しいけど、科学の力を使ってみたらそれに近いのが出来てね」

「博士ってすごい万能ですね」

２人の言葉に勇樹はジト目て見て言うと、アミタは「そうですよ！」と目を光らせながら答える。
「博士は初めて魔法に近い科学を再現したのです！」
「ああ、そう言えば魔法使いのステッキに付いている水晶は確か科学で証明されたって聞いたことあります…すごいですね博士は
勇樹は戸惑うように答えていると、シャチ型のメカが家電バードメカの前にやってきて３人を睨む。
「話はあとでいいかな、今はこれを倒すよ！」
「わかりました！」
「りょうか～い」
２人はそう言うと同時に勇樹は操縦席へと戻り、コントロールレバーを掴む。それと同時にアミタとキリエは（科学の力を利用して）空を飛ぶ。
「さて、あなた田の相手は私たちですよ！」
「妨害するかもしれないよ～、ＢＳＳ」
『こっちもいるのを忘れんなよ！』
３名はそう言うと同時に、シャチメカに向けて攻撃していく。
・・・

その頃アレンとなのはは、柱があると思う場所へと行っていた。
「それにしても妙だ…」
「アレンさん、妙って？」
「人だ、ここは都会とは言え時間はまだ夜あたり。いくら何でもいないのは妙だ」
「そう言えば」
アレンの言葉になのははあたりを見渡すと、人がいないことに気づく。
「それに…この霧は何だ？」
「霧…もしかして私たちを妨害するために？」
なのはの言葉にアレンは「さあな」と言いながら地面に着陸し、背中のアームを閉じる。
アレンの言う通り、柱の近くに行くと霧が出てきて前が見えにくくなり始めた。それ以外に柱に近づけば近づくほど霧は濃くなっていき視界がくらみ始めた。
「しかし、幸い柱は私たちが向いている方にある。封印するとしたらまだ安心するレベルだ」
「はい、それじゃあ急いで」
なのははそう言いながらレイジングハートを変形させ、封印しようとした…その時。

「はあああっ!!」

ドガアアアアアアッ!!

突然仁志がアレンたちに攻撃してきたが、アレンが刀で防いでなのはを守るように防いだ。

「なのは、私が防ぐから今のうちに!!」

「は、はい!!」

アレンの言葉になのはは急いでレイジングハートをジェルシードに向けて封印し始める。

シュッ!!

レイジングハートから放たれた桃色の光線はジェルシードに当たり封印する…だが。

「封印光線、オンッ!」

赤紙の少女が掃除機型の光線機を使いジェルシードに向けて茜色の光線を放つと、ジェルシードに当たりお互い封印していく。

「耐えれるか!?」

「た、耐えれます…リリカルマジカル!!　シリアル１９！」

苦しむなのはにアレンは心配しているが、仁志は「ぬうううっ！」と剣で彼女の刀に攻撃していく。

その影響か、刀から火花が散っていき刃が少しずつかけていく。

「た、耐えてくれ…!!」

アレンはそう言って刀を掴んでいた…その時。

「封印!!」

ドガアアアアッ!!

なのはに合わせるようにレイジングハートから桃色の光線が放たれ、ジェルシードを封印する…だが相手も相手だ。

「封印、吸引!!」

ガアアアアッ!!

赤毛の少女がしている掃除機から、茜色の光線が放たれてジェルシードを封印していく。

２人の力によりジェルシードは無事封印し、空中で浮かんでいる。

「なっ！　封印しただと?!」

「あの少女の装置…そしてなのはの力で封印したのか」

その光景を見た仁志は驚くが、アレンは冷静に答えると同時に、彼のおなかを蹴りなのはから遠ざける。

「ぐうっ！　貴様！」

「邪魔はさせない!!」

アレンはそう言いながら彼に攻撃していく、それを見たなのはは「ありがとう、アレンさん！」と言いながらジェルシードを手に入れようと走った…その時。

「させるかっての!!」

ガションガションッ！　バシュウウッ!!

赤毛の少女は掃除機の先に付いているアンテナを巨大な手形のアームに変え、ジェルシードに向けて放った。

思った以上に速いのか気づいたときにはジェルシードを掴もうとした、その時。

バジッ…バジジジッ!!

突然ジェルシードから青色の雷が出てきて、雷は掃除機型の装置に当たると本体と思われるところから煙を噴き出す。

「な、なんだ?!」

それを見た少女は驚くと、なのはも「これって…封印したのに!?」と驚いていた。

「あれは、いったいなんだ!?」

「私に聞いて知るか！　だが、何かに反応しているようだ！」

仁志とアレンもそれを見て驚いていた。そしてジェルシードはそのまま空中に浮かび、再び青色の雷を辺りに散らしながらどこかへと飛んでいく…が。

「させてたまるかあああ!!」

少女は叫ぶと同時に再びハンドをジェルシードに向けて放つ。ジェルシードは青色の雷をハンドに向けて放つが、少女は「2度も当ててたまるか!」と言いながらハンドをよけながらつかもうとした。

それを見たなのはは「させない!」と言いながら空を飛び、ジェルシードを捕獲しようとした。そして。

ガギイイッ!!

ハンドとレイジングハートは交差するようにし、その間にジェルシードは囲むように固定された。

「あっ!!」

「なっ!!」

「む!?」

それを見たユーノとアレン、そして仁志は驚いた…その瞬間。

ピシピシピシピシッ！

突然レイジングハードと掃除機型の機械に亀裂が入る、まるで氷のように亀裂が広がっていき。そして。

ビガアアアアアッ!!　ドガアアアアアアアッ!!!

「きゃああああっ!!」

「うううっ!!?」

突然強力な光が放たれて２人はそれに巻き込まれてしまった。

まるで、地面に突然穴が出てきたかのように。

・・・

空中で飛んでいたフェイトとアルフは、その気配を感じたのか2人は例の方向へと飛んでいた。
「途中少し煙幕があったから戸惑っていたけど、アルフのおかげだよ」
「ちょっとよしてくれよ、アタシだけじゃなくてアリシアやリニスのおかげだよ!」
「うん、そうだね。お姉ちゃんとリニスのおかげでここまでこれたかもしれない」
アルフの言葉にフェイトは照れながら答えていると、アルフは「あれって…なんだ?」とあるものを見つける。
それは巨大な家電製品型の鳥メカとシャチ型のメカが戦っていた。途中赤色の女性と桃色の女性が協力するように戦っていた。
「仲間…かな? あの特徴すぎるロボットは前に見たことある」
「あー、そう言えば聞いていたね…どうする?」
「私はジェルシードの方へと行く。アルフはあの人たちに」
「了解!」
フェイトの言葉にアルフは答えると、彼女はそのままメカの方へと飛んでいく。
それを見たフェイトは「ありがとう」と答えると同時に、例の場所へと飛んでいく。